

龍野市

清水遺跡

— 県道桑原北山揖保川線緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告書 —

1999. 3.

兵庫県教育委員会



南からの調査地遠景（空中写真）



東からの調査地遠景（空中写真）



南東から調査地を望む



SH02・03 (北から)

龍野市

清水遺跡

— 県道桑原北山揖保川線緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告書 —

例 言

1. 本書は、龍野市揖西町清水に所在する清水遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県道桑原北山揖保川線緊急道路整備事業に先立つもので、兵庫県竜野土木事務所の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成4年度に分布調査、平成5年度に確認調査、平成6年度に確認調査および全面調査を実施した。なお、全面調査については、堺松下建設に作業委託を行った。
3. 整理作業は、平成10年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が同事務所にて実施した。なお、遺物写真については熊衣川に委託した。
4. 調査は兵庫県竜野土木事務所の県道桑原北山揖保川線緊急道路整備事業に伴う多角点座標をもとに国土座標を求め、これを基準に実施した。なお、調査地は第V系に位置する。
5. 標高は東京湾平均海水準を基準とした。
6. 本書の執筆は山下史朗（現社会教育・文化財課）、松岡千寿、池田征弘が行い、編集は池田が行った。
7. 本書にかかる遺物・図面・写真などは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館（明石市魚住町清水）に保管する。
8. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々の御援助・御指導・御教示を頂いた。記して深く感謝の意を表するものである。
志水豊章、市村高規、岸本道昭、古本 寛

凡 例

1. 遺構については、堅穴住居跡をSH、櫛列をSA、溝をSD、土坑をSKと略称している。
2. 遺物については弥生土器の断面を黒塗りにし、石器の断面を白抜きにしている

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	(池田征弘)	1
第1節 遺跡の位置		1
第2節 遺跡をとりまく環境		1
第2章 調査の経緯	(池田)	4
第1節 調査に至る経過		4
第2節 発掘調査の経過		4
第3節 整理作業の経過		6
第3章 調査の結果		8
第1節 調査の概要	(松岡千寿)	8
第2節 遺構について	(松岡)	16
第3節 遺物について	(池田)	25
第4章 まとめ	(山下史朗)	31

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	周辺の遺跡分布図	2
第3図	清水遺跡調査位置図	5
第4図	調査区配置図	7
第5図	遺構平面図	9
第6図	調査区土層断面図(1)	10
第7図	調査区土層断面図(2)	11
第8図	A区平面図	12
第9図	B区平面図	13
第10図	C区平面図	14
第11図	D区平面図	15
第12図	SH01	16
第13図	SH02・03	18
第14図	SH04	19
第15図	SH05	19
第16図	SA01・02	20
第17図	SD05	21
第18図	土坑(1)	23
第19図	土坑(2)	24
第20図	SH01、02・03、SD05出土遺物	26
第21図	SK16、17出土遺物	27
第22図	SK02、03、06、08、09、14、19出土遺物	29
第23図	pit、包含層出土遺物	30
第24図	清水遺跡微地形図	32
第25図	10型土坑を有する竪穴住居の分布	34

表目次

第1表	清水遺跡調査一覧	4
第2表	10型中央土坑を有する竪穴住居一覧表	35

図版目次

- 巻首図版1 ・上 南からの調査地遠景 (空中写真) ・下 東からの調査地遠景 (空中写真)
- 巻首図版2 ・上 南東から調査地を望む ・下 SH02・03 (北から)
- 写真図版1 調査地全景 (空中写真)
- 写真図版2 ・上 A区全景 (東から) ・中 A区西半部 (東から)
・下 SH01 (南から)
- 写真図版3 ・上 B区全景 (東から) ・中 SD05 (北西から)
・下 SD05土層断面 (北西から)
- 写真図版4 ・上 SK19 (東から) ・中 SK19土器出土状況 (西から)
・下 SK19土層断面 (東から)
- 写真図版5 ・上 C区全景 (北から) ・中 SH02・03 (南東から)
・下 SH02・03 (北から)
- 写真図版6 ・上 SH03中央土坑 (南西から) ・中 D区全景 (南から)
・下 SH05中央土坑断面 (北から)
- 写真図版7 SH02・03、SK16、17、09、19出土遺物
- 写真図版8 ・上 SH01、SH02・03出土遺物 ・下 SH02・03、SD05出土遺物
- 写真図版9 ・上 SK16出土遺物 ・下 SK16、17出土遺物
- 写真図版10 ・上 SK02、03、06、08、14出土遺物
・下 SK09出土遺物
- 写真図版11 ・上 SK19出土遺物 ・下 SK19、pit、包含層出土遺物

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

清水遺跡は、龍野市揖西町清水を中心とした付近に所在する遺跡である。遺跡は龍野市市街地の西方約1.2kmの、揖保川の氾濫の影響を受けない右岸の段丘上に位置している。この段丘上の平地は南北と西方を丘陵に囲まれ、所々に半田山などの独立丘陵が位置している。段丘上には北側や西側の丘陵から中垣内川や古子川などの小河川が流れ込み、扇状地が形成されている。清水遺跡はこのうち中垣内川によって形成された扇状地上に営まれている。

第2節 遺跡をとりまく環境

近年、清水遺跡の周辺では龍野市教育委員会によって多くの調査が行われ、その各報告において既にまとめられているので、ここではごく簡単に紹介するにとどめたい。

近辺では旧石器時代の遺跡は発見されておらず、遺物も採集されていない。龍野市内では神岡町の大住寺趾地遺跡でナイフ形石器が出土しているのみである。

縄文時代になると中期末以降の遺構・遺物が少量ではあるが広範囲で見つかっている。そのなかでも、清水遺跡(1)では中期末の方形竪穴住居が検出され、南山高屋遺跡(27)でも中期末から後期初めの土器が出土し、方形竪穴住居が検出されている。

弥生時代になっても前期については半田山墳墓群(16)で土器棺墓・土塚墓などが検出されている以外では、小神社の堂遺跡(4)、南山高屋遺跡などで土器が出土しているのみである。

弥生中期には遺跡数が増加する。清水遺跡、小神社の堂遺跡、養久乙城山遺跡(20)、養久山前地遺跡(21)、龍子向イ山遺跡(24)、南山高屋遺跡、尾崎遺跡(28)、北山遺跡(30)、竹万遺跡(31)、佐江遺跡(29)など平地や丘陵部に広範囲に広がっている。ただし、墓については検出されておらず、墓城の存在についてはよくわからない。

弥生後期には集落の数は減少し、清水遺跡や小神社の堂遺跡で竪穴住居が検出されているのみである。それに対して、小神社の堂遺跡で方形周溝墓、円形周溝墓、南山高屋遺跡では土塚墓など墓の検出がめだってくる。さらに、終末期には白鷺山墳墓群(14)、半田山墳墓群、養久山墳墓群(17)、池の谷墳墓群(32)などのように丘陵部に墳墓が造られている。

古墳時代にはいと、この地域の丘陵上には弥生終末期から引き続いて古墳が造られている。養久山を中心とする南側の丘陵上では、この地域の首長墳と考えられている龍子三ツ塚古墳群(23)をはじめ



第1図 清水遺跡の位置



1. 清水遺跡 2. 小神出屋敷遺跡 3. 小神南遺跡 4. 小神辻の堂遺跡 5. 小神芦原遺跡
6. 景雲寺古墳群 7. 山根墳墓群 8. 中垣内古墳群 9. 小神古墳群 10. 大道寺跡 11. 小神庵寺
12. 西宮山古墳 13. 狐塚古墳 14. 白鷺山墳墓群 15. 中臣遺跡 16. 半田山墳墓群
17. 美久山墳墓群 18. 美久遺跡 19. 美久谷遺跡 20. 美久乙城山遺跡 21. 美久山前地遺跡
22. 鳥坂古墳群 23. 籠子三ツ塚古墳群 24. 籠子向イ山遺跡・古墳群 25. 籠子長山古墳群 26. 南山古墳群
27. 南山高隈遺跡 28. 尾崎遺跡 29. 佐江遺跡 30. 北山遺跡 31. 竹万遺跡 32. 池の谷墳墓群
33. 新宮遺跡 34. 新宮東山古墳群 35. 中垣内三味山古墳群 36. 中垣内天神山古墳群 37. 中垣内庵寺

第2図 周辺の遺跡分布図

として、養久山墳墓群、鳥坂古墳群(22)、南山古墳群(26)など大小様々な古墳が造られている。また北側の丘陵にも新宮東山古墳群(34)、景雲寺古墳群(6)などの古墳が見られる

古墳時代中期にはこの地域にはあまり大きな古墳は認められていない。北側の丘陵で、わずかに前方後円墳である中垣内天神山古墳群(36)が首長墳と考えられている。またそれに引き続く中垣内三昧山古墳群(35)などがある。

古墳時代後期になると北側の丘陵に前方後円墳で横穴式石室を内部主体とする西宮山古墳(12)が首長墳として現れ、また、100基を超える大規模な群集墳である小神・中垣内群集墳(6・8・9)が見られる。それに対して、南側の丘陵には半田山墳墓群、龍子向イ山古墳群(24)、龍子長山古墳群(25)など、横穴式石室を内部主体とする小規模な古墳群が見られる。

古墳が数多く認められるのに対して、その居住域についてはまだよくわかっていない。清水遺跡で方形竪穴住居跡が検出されていることを除けば、南山高屋遺跡、養久山前地遺跡などで比較的掘立柱建物を主体とした小規模な集落が検出されているのみである。

奈良時代には清水遺跡の所在する周辺は『風土記』にみえる排保郡18里のうちの出水里に相当する。北側の丘陵の山裾に沿って東西に山陽道が設置され、その沿道には清水遺跡、小神南遺跡(3)、小神辻の堂遺跡、小神戸原遺跡(5)などの集落遺跡が分布している。また、龍野市域には古代寺院が数多く分布していることで知られているが、中垣内廃寺(8)、小神廃寺(11)などの寺院跡が比較的密に存在している。

平安時代後期から鎌倉時代にかけては溝で囲まれた屋敷跡が検出された小神出屋敷遺跡(2)やそのほか、小神辻の堂遺跡、尾崎遺跡などで建物群が検出されている。この地域は平安時代後期以降には平位庄が西に隣接する桑原庄などとともに最勝光院領のひとつとしてみられ、広範な開発が行われたものと思われる。

参考文献

兵庫県史編纂専門委員会『兵庫県史 考古資料編』1992年

龍野市史編纂専門委員会『龍野市史』第1巻 1978年

龍野市史編纂専門委員会『龍野市史』第4巻 1984年

上記文献のほか周辺で調査された各遺跡の報告書を参考にした。

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

県道龍野相生線は龍野市街地から相生方面へ集落を通過する交通路であるが、近年交通量も増加している。そのため、集落を迂回するための道路を新設することとなった。竜野土木事務所により道路の整備が、周知の遺跡である清水遺跡を含む地域に計画されることとなった。事業対象地周辺は既にほ場整備に先立って龍野市教育委員会によって平成元・2年に確認調査・全面調査がおこなわれ、縄文時代から奈良時代にかけての遺構・遺物が検出されている（第1表）^①。そこで兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では竜野土木事務所より依頼を受け、平成4年度に分布調査、平成5年度に確認調査、平成6年度に確認調査・全面調査を行った。

番号	調査年度	検出された主な遺構
1	平成元年	竪穴住居跡、溝
2	平成元年	溝（古墳）
3	平成元年	竪穴住居跡
4	平成元年	溝（古墳）
5	平成2年	竪穴住居跡・溝（弥生）、掘立柱建物跡・溝（奈良）
6	平成2年	竪穴住居跡（縄文）
7	平成2年	溝（古墳）、竪穴住居跡
8	平成2年	溝（弥生）、柱穴
9	平成2年	溝（弥生）、竪穴住居跡（古墳）

第1表 清水遺跡調査一覧（龍野市教育委員会全面調査のみ）

第2節 発掘調査の経過

1. 分布調査（遺跡調査番号920132）

調査担当者 企画調整班 水口富夫 調査第3班 長濱誠司

調査期間 平成4年4月14日

調査面積 3,000㎡

すではほ場整備が実施されていたため遺構遺物の存在を確認することはできなかったが、龍野市教育委員会による周辺の発掘調査の結果から工事予定範囲に遺跡が広がっている可能性が高いものと考えられた。

2. 確認調査（遺跡調査番号930123）

調査担当者 調査第3班 山田清朝 高井治美

調査期間 平成5年8月2日～8月5日

調査面積 156㎡



第3図 清水遺跡調査位置図

県道拡幅部分および新設部分に2m×2mのグリッドを20m間隔に計39ヶ所設定し、重機および人力により掘削し、精査を行った。その結果、No45～No52で柱穴、溝などの遺構が検出され、弥生土器が出土した。そのほか、No20～No44はは場整備による擾乱が激しく、No53～No62では杭列、溝状の落ち込みなどが検出されたが、遺物が伴わず埋蔵文化財かどうか確認することができなかった。

3. 全面調査（遺跡調査番号940171・940185）

調査担当者 調査第3班 山下史朗 松岡千寿 池田征弘

調査期間 平成6年5月24日～10月7日

調査面積 2,289㎡（確認調査88㎡、全面調査2,201㎡）

なお、調査にあたっては以下の人々の協力をえた。

現場補助員 横山 春美 西口 亜佳音 現場事務員 古川 朋子

(1) 確認調査

前年度確認調査地のNo53～No62で検出された杭列などの遺構の性格を明らかにするため、1m×35mと1m×53mのトレンチを設定し、重機および人力により掘削を行い、精査を行った。その結果、中世以降の耕土層や洪水層が認められたが、明瞭な遺構は認められなかった。

(2) 全面調査

前年度確認調査で遺構・遺物の検出されたNo45～No52付近に調査区を設定し、調査できない既存用水路や使用中の農道部分などを境にして、A～Dの4地区に分割して調査を行った。重機により表土を掘削したのち、人力により包含層を掘削し、遺構の精査を行った。航空写真を含む写真の撮影や実測図の作成を行った。

第3節 整理事業の経過

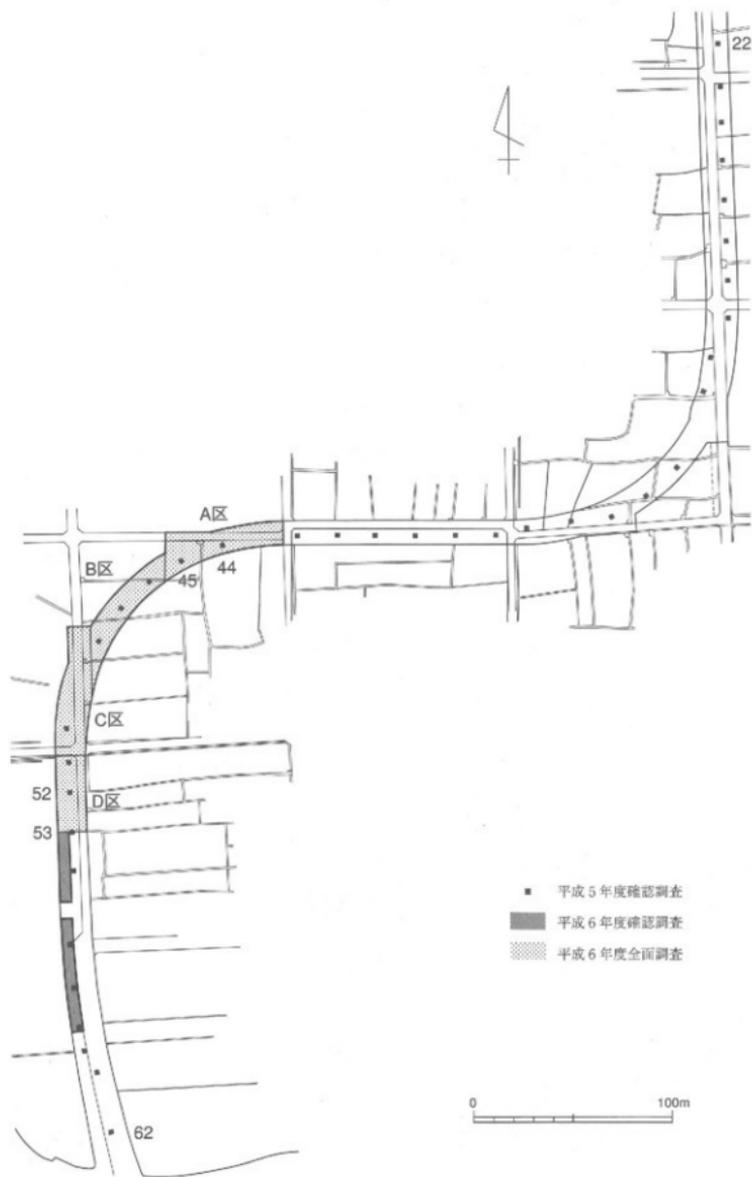
整理担当者 調査第3班 松岡千寿 調査第2班 池田征弘

整理普及班 長濱誠司

遺物は28ℓ入りコンテナにして6箱分出土し、当事務所にて接合・復元・実測・トレース・レイアウト・写真撮影などを行った。それと平行して遺構図についてもトレース・レイアウトを行った。なお遺物写真の撮影は駒衣川に委託した。

上記の作業にあたっては下記嘱託員の協力を得た。

主任技術員	八木 和子	図化技術員	飯田 章子	図化技術員	岡田 美穂
	宮田 麻子		鈴木 まき子		山口 幸恵
企画技術員	小山 みゆき		横山 キクエ		真子 ふさ恵
	本窪田 美子		竹内 泰子		宮野 正子
図化技術員	石野 照代		萩原 聡美	日々雇用	川村 由紀
	炭木 恵美子		岸野 奈津子		小田 賢



第4図 調査区配置図

第3章 調査の結果

第1節 調査の概要

清水遺跡の立地する場所は、中垣内川が蛇行する部分にあたる。遺跡は、この川の堆積物によって形成された、中洲状微高地を利用して営まれたものである。今回の調査地には、北側と南側に中洲状微高地が立地しており、遺構もその微高地上で検出している。

調査地は便宜上、A～D区の4地区に区分した。

A区(第8図)

A区では、80cmの旧耕土の下に、10cmの水田土壌層がみられる。水田土壌層の下には、遺物を包含している暗灰黄色シルト質極細粒砂、遺構検出面はその下の灰色シルト上面である。

A区は、中洲状微高地に立地し、調査区の西半部で堅穴住居跡(SH01)、土坑、溝、ピットを検出した。堅穴住居跡(SH01)は南半部のみ検出したが、残存状態は良くない。

B区(第9図)

B区では、80cmの旧耕土の下に、10cmの水田土壌層がみられる。遺構検出面はその下の灰色シルト上面である。南側は、旧耕土と基盤層の間に、黒褐色のシルトが堆積しており、南側にむかって、湿地状になっている。

A区に続く北側は、中洲状微高地に立地し、調査区中央付近で、土坑、溝、ピットを検出した。SD05の南東にある柱穴跡については、建物を復元するには至らなかった。南側には、遺構はなかった。

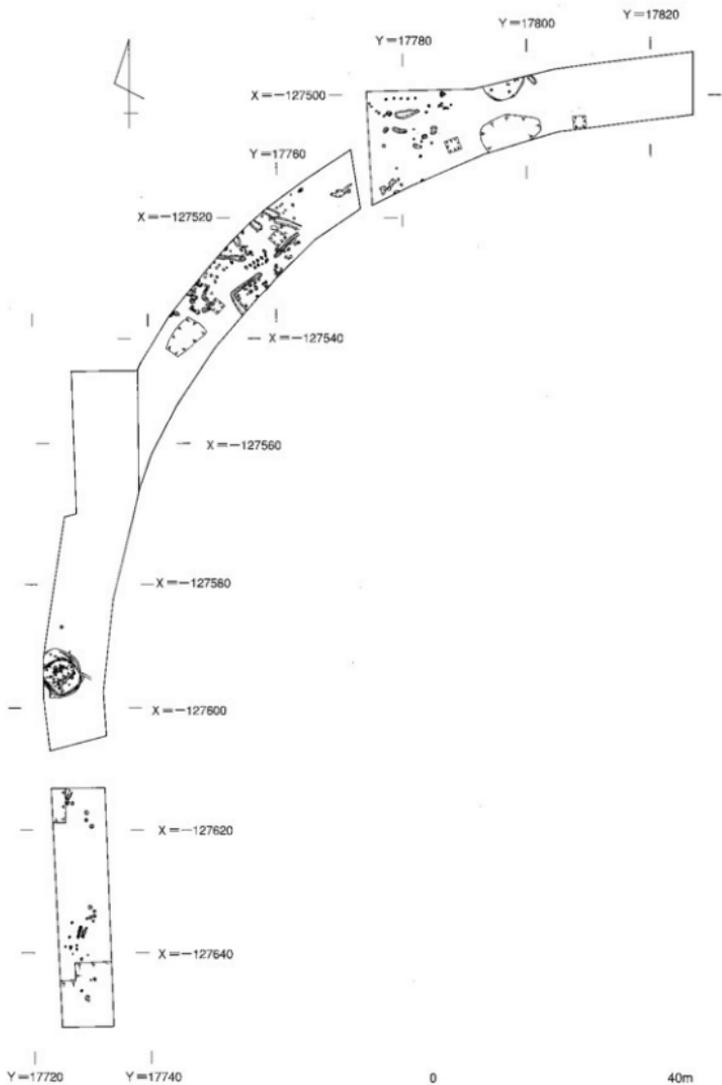
C区(第10図)

北側は、道路のコンクリートがあったため、土層断面は観察できなかった。しかし、B区の土層断面から推測すると、C区北側は湿地状であったと考えられる。C区南側では、40cmの旧耕土の直下に遺構面である黄褐色極細砂上面が検出できる。北側のほうがレベル高が低く、旧河道もしくは後背湿地から南側にむかって高くなり、中洲状微高地を形成していることがわかる。遺構も北側では検出されず、南側の微高地に堅穴住居跡(SH02・03)、溝、ピットを検出している。

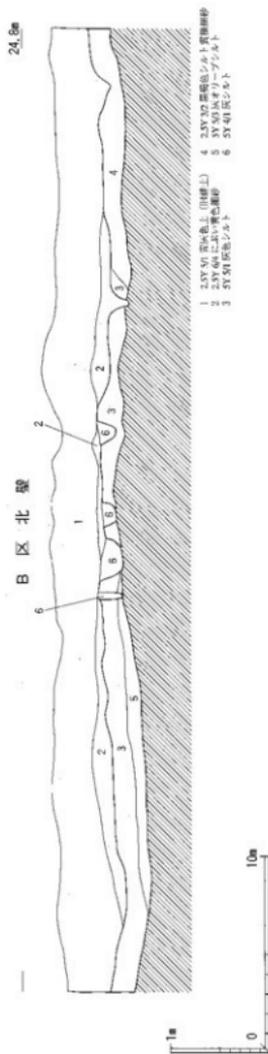
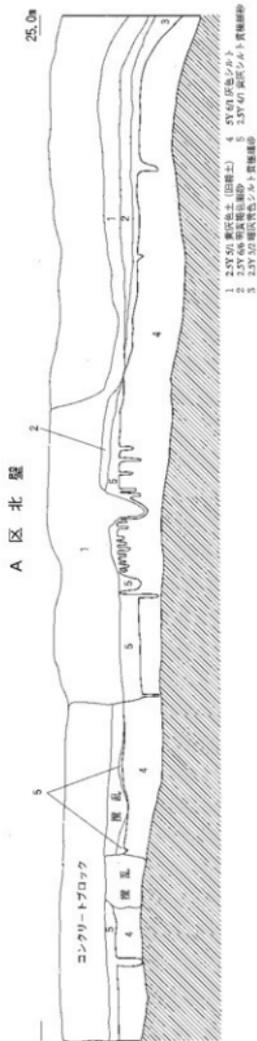
D区(第11図)

D区もC区から引き続き、中洲状微高地に立地している。D区では、40cmの旧耕土の直下に遺構面である黄褐色極細砂上面が検出できる。D区の調査区北端と中央部で堅穴住居跡(SH04、05)、土坑、ピットを検出した。

北側の堅穴住居跡(SH04)はわずかに周壁溝の一部を検出したのみであった。調査区中央付近で検出された堅穴住居跡(SH05)は、中央土坑2基を検出したにすぎない。このため、規模・構造は不明であるが、中央土坑が接近して2基検出されたため、堅穴住居跡は重複していた可能性が高い。

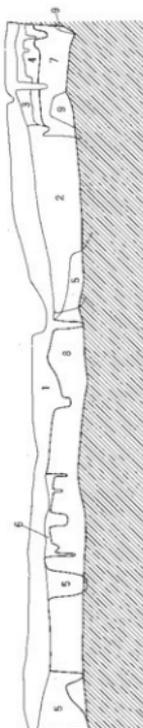


第5図 遺構平面図



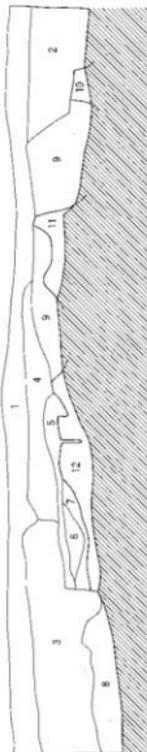
第6図 調査区土層断面図(1)

C 区南側西壁 24.0m



- 1 黄土
- 2 硬泥
- 3 650 青褐色細砂
- 4 25YR 3/1 黄褐色シルト (6層頂部を境) 砂礫
- 5 砂礫
- 6 住居跡土
- 7 2.5Y 5/1 黄褐色シルト
- 8 2.5Y 6/1 黄褐色シルト (6層頂部を境) 砂礫
- 9 砂礫

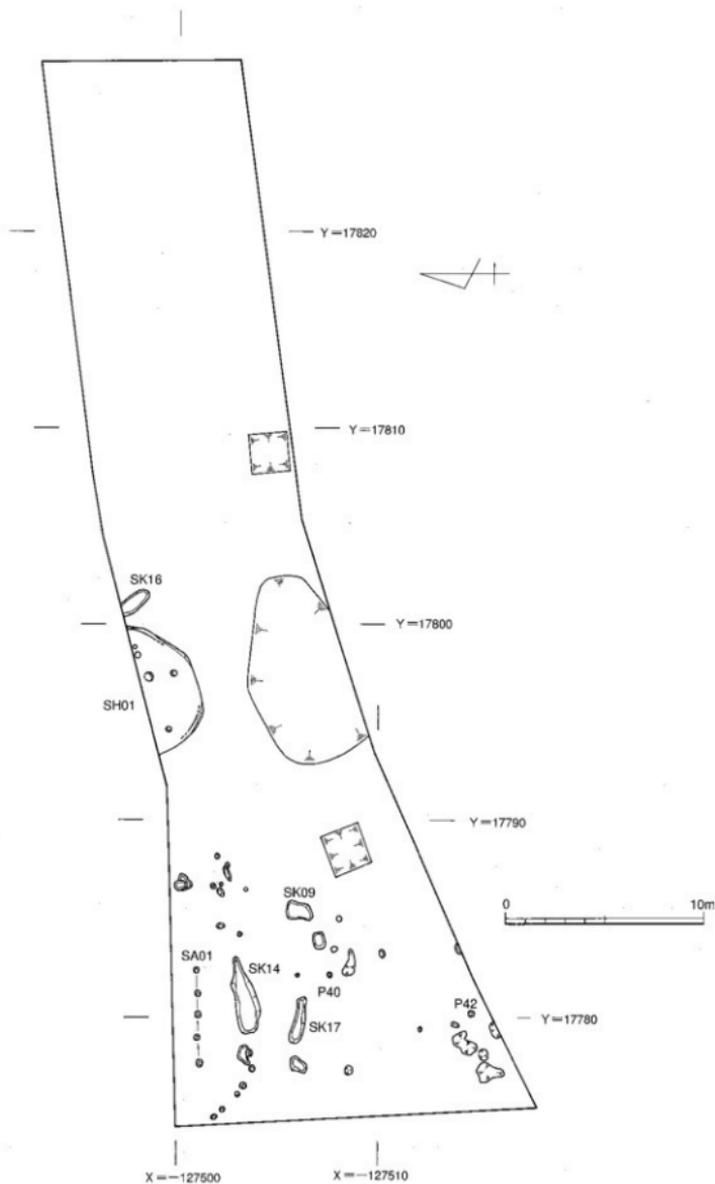
D 区西壁 23.8m



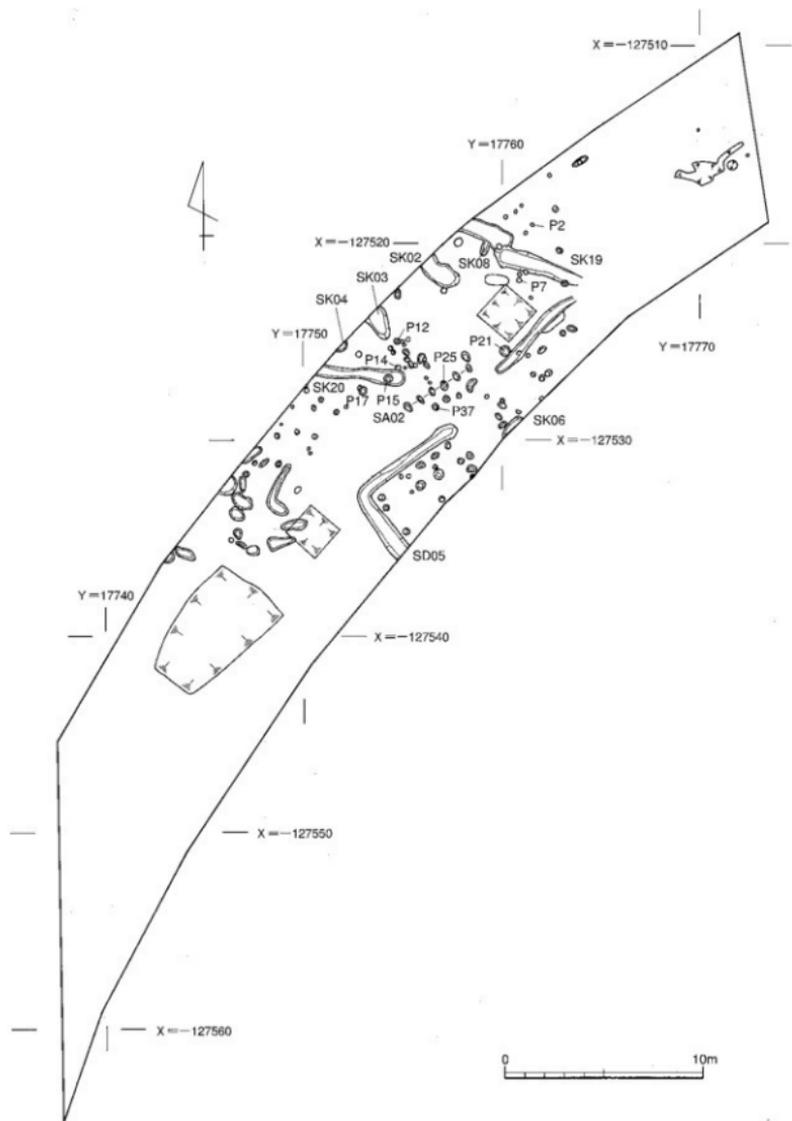
- 1 黄土
- 2 硬泥
- 3 礫石入り粗砂
- 4 2.5Y 6/1 土黄色微細砂り粗砂礫
- 5 2.5Y 6/1 土黄色微細砂り粗砂礫
- 6 2.5Y 5/1 黄褐色シルト粗砂礫
- 7 2.5YR 5/1 黄褐色微細シルト粗砂礫
- 8 2.5Y 6/1 土黄色微細砂り粗砂礫
- 9 砂礫
- 10 4PbY 4/6 黄褐色シルト黄褐色砂
- 11 2.5Y 6/1 土黄色微細砂り粗砂礫
- 12 4PbY 5/6 黄褐色シルト粗砂礫



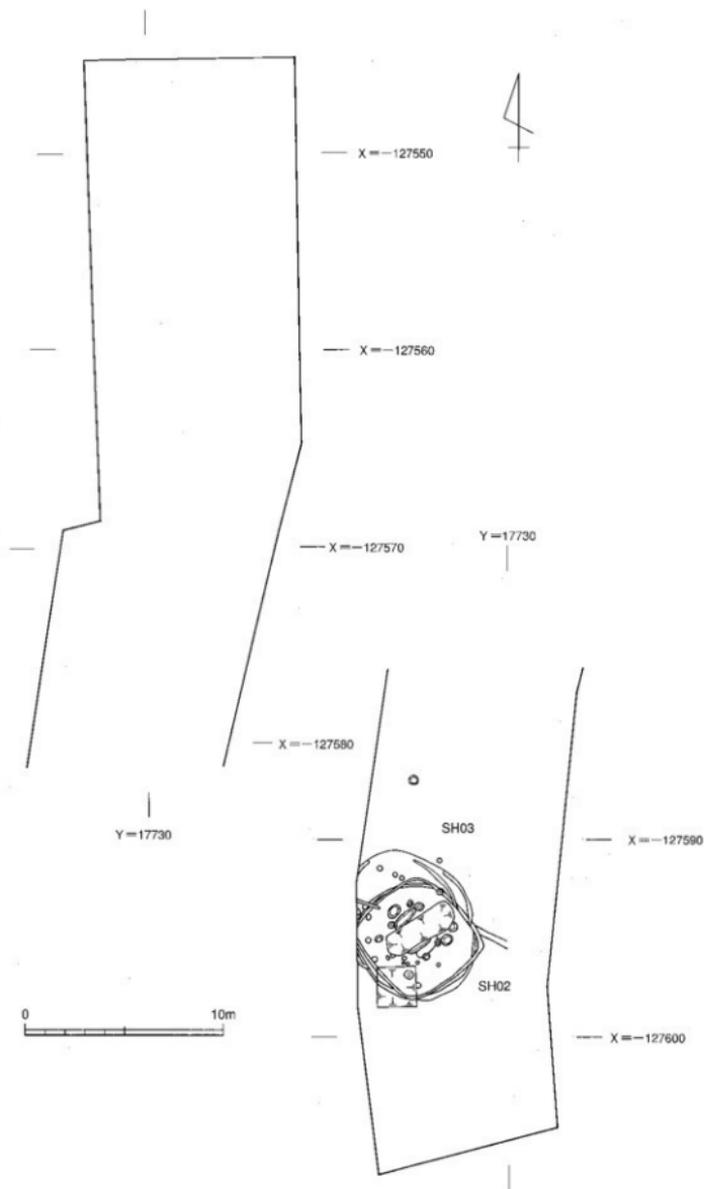
第7図 調査区土層断面図(2)



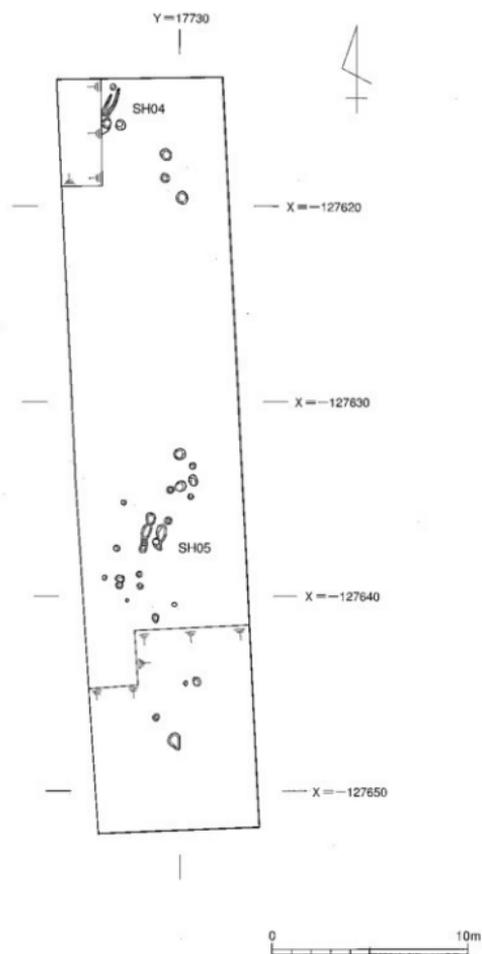
第8图 A区平面图



第9图 B区平面图



第10图 C区平面图



第11图 D区平面图

第2節 遺構について

清水遺跡では、竪穴住居跡、溝、土坑、祠等を検出した。

(1) 竪穴住居跡

SH01 (第12図)

A区の中央北側で検出した。検出したのは南半部のみで、北側は調査区外に延びている。全体を検出していないが、復元直径約7mの円形住居跡である。遺存状況は悪く、検出面からの深さは0.1m程である。しかし、A区北側の土層断面から、深さ0.2mは復元できる。屋内施設としては、周壁溝、柱穴などを検出した。

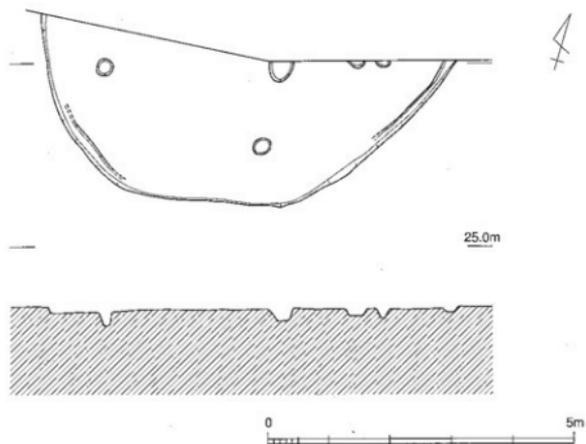
周壁溝は部分的にしか検出していない。幅は、検出面で0.2m、深さ0.1m、底における幅は0.1mである。

柱穴は、合計5基を検出している。柱掘方の直径は平均0.25mを測り、床面からの深さは平均0.15mを測る。

全体像は不明だが、6基の支柱穴で構成された住居跡と考えられる。埋土から弥生土器がごく少量出土している。

SH02 (第13図)

C区の南側で検出した。この住居跡は、後世の削平を受けていること、SH03と重複していること、住居跡中央部に擾乱坑があることなどから、遺存状況は良くない。西側はわずかに調査区外に延びているがほぼ全体を検出することができた。この住居跡は検出面の高低差から、SH03より古いと考えられる。また、SH02は、支柱穴を共有しながら2基の竪穴住居跡が重複していた



第12図 SH01

ため立て替えが行われていたと考えられる。住居跡の埋土からは、比較的多くの弥生土器が出土しているが、SH03と重複している部分から出土したものについては両者が混入している可能性がある。

SH02-1は、直径6.3mの円形の竪穴住居跡である。検出面からの深さは0.1mである。

屋内施設としては、周壁溝、柱穴、中央土坑を検出した。

周壁溝は、検出面での幅は0.25m、深さ0.1m、底における幅は0.18mを測る。主柱穴は4基検出している。柱掘方の直径は平均0.33mを測り、床面からの深さは平均0.5mを測る。中央土坑は住居跡の中央からやや南よりの位置に、1基検出している。中央部の攪乱坑のため全体は検出できなかったが、規模は、長軸方向1.45m、短軸方向0.60m（残存長）、深さ0.03mを測る。平面形は細長い楕円形を呈している。この土坑には、炭化物、焼土が堆積していた。この土坑は10型中央土坑の土坑1に相当するものと考えられる。

SH02-2は、一辺6.4mの隅丸方形の竪穴住居跡である。検出面からの深さは0.1mである。

屋内施設としては、周壁溝、柱穴、中央土坑を検出した。

周壁溝は、検出面での幅は0.2m、深さ0.1m、底における幅は0.1mを測る。主柱穴は、SH02-1と同じ柱穴を利用している。中央土坑は、住居跡の中央からやや南よりの位置に、1基検出している。中央部の攪乱坑のため全体は検出できなかったが、規模は、長軸方向1.3m、短軸方向0.80m（残存長）、深さ0.08mを測る。平面形は細長い楕円形を呈している。この土坑には、炭化物、焼土が堆積していた。この土坑は10型中央土坑の土坑1に相当するものと考えられる。

SH03（第13回）

C区の南側に検出した。この住居跡は、後世の削平を受けていること、SH02と重複していることなどから、遺存状況はあまり良くない。南西側は調査区外に延びている。調査の結果この住居跡は、SH02と重複し、検出面の高低差から、SH02より新しいと考えられる。また、SH03は、2基の竪穴住居跡が重複していた。埋土からは弥生土器の細片が出土している。

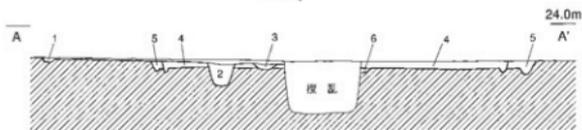
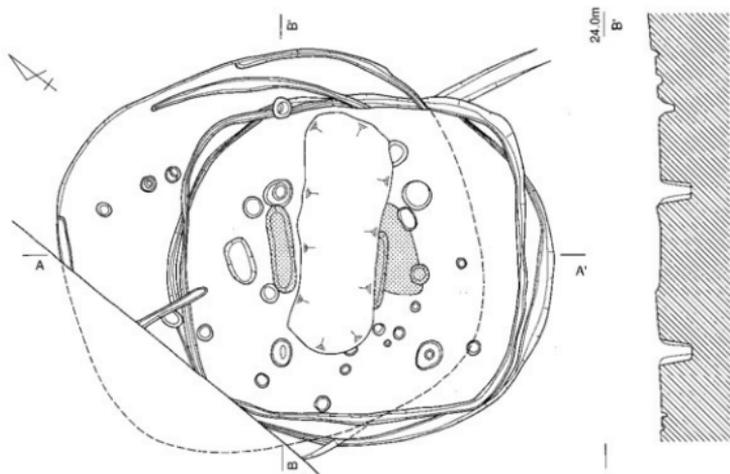
SH03-1は、部分的にしか検出できなかったが、円形の竪穴住居跡と考えられ、復元直径は約6.2mを測る。遺存状況は悪く、検出面からの深さは約0.05mである。

屋内施設としては、周壁溝は確認できたが、柱穴・中央土坑については不明である。周壁溝は、検出面での幅は0.24m、深さ0.1m、底における幅は0.14mを測る。

SH03-2は、隅丸方形の竪穴住居跡である。住居跡の西側は調査区外であり、南側はSH02と重複しているため、全体の規模は不明だが、一辺の長さは約6mを測る。検出面からの深さはSH03-1と同様に約0.05mである。

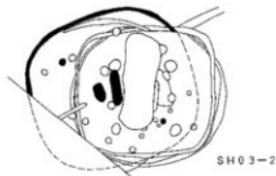
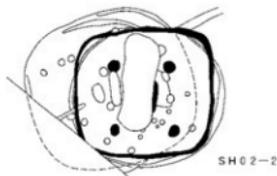
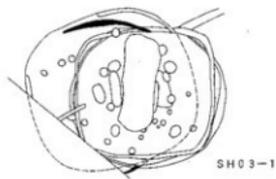
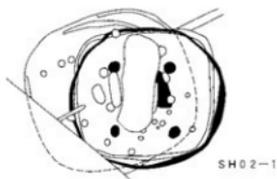
屋内施設としては、周壁溝、柱穴、中央土坑を検出した。柱穴は2基検出している。柱掘方の直径は平均0.25mを測り、床面からの深さは平均0.5mを測る。周壁溝は、検出面での幅は0.15m、深さ0.1m、底における幅は0.1mを測る。

中央土坑はいわゆる10型中央土坑で、住居跡のほぼ中央と想定できる場所を挟んで土坑0、土坑1の1組を検出している。北側の土坑0は、長軸方向0.75m、短軸方向0.44m、深さ0.34mを測る。平面形は楕円形を呈し、埋土は10Y R5/1 褐灰色中粒砂である。土坑1は、長軸方向に1.45m、短軸方向に0.37m、平面形は細長い楕円形を呈している。埋土は2.5Y 2/1 黒色灰層で、炭化物、焼土が堆積していた。



- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1 5Y 8/1 灰色シト質極細砂 | 4 2.5Y 5/1 黄灰色極細砂質シト |
| 2 10Y 8/1 暗灰色中砂 | 5 2.5Y 5/2 黄灰色シト質極細砂 |
| 3 2.5Y 2/1 黒色泥層 | 6 2.5Y 2/1 黒灰色泥層 |

※網点は土の範囲



第13図 SH02・03

SH04 (第14図)

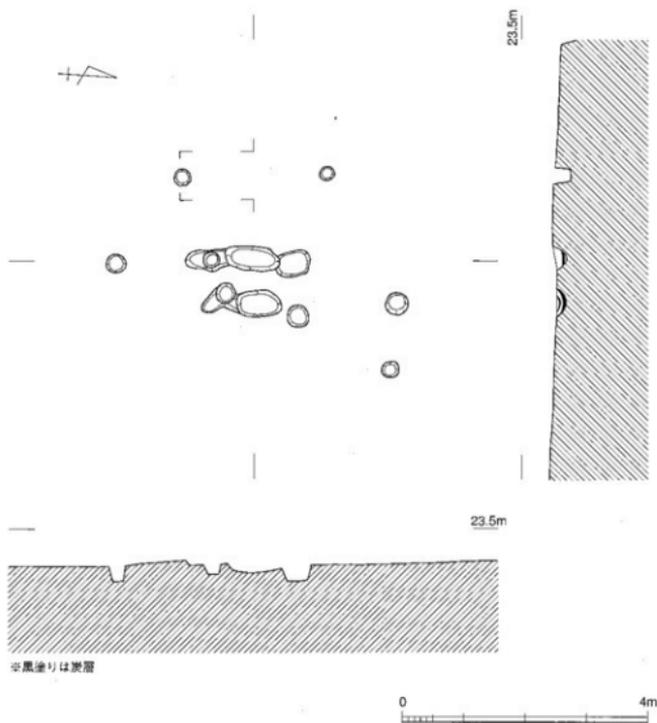
D区北側で検出した。遺存状況は悪く、周壁溝の一部を検出したのみである。周壁溝は2重にめぐらされていた。外側の周壁溝は、検出面での幅は0.2m、深さ0.1m、底における幅は0.1mを測る。内側は、検出面での幅は0.15m、深さ0.1m、底における幅は0.1mを測る。遺構に伴って遺物は出土していない。



SH05 (第15図)

D区中央部で検出した。遺存状況は悪く、かろうじて柱穴と中央土坑を検出した。中央土坑の両端に柱穴を配する土坑が並んで2基検出されていることから、住居跡が2基重複していた可能性が高い。柱掘方の直径は平均0.3mを測り、床面からの深さは平均0.3mを測る。中央土坑は、長軸方向0.8m、短軸方向0.4m、深さ0.2mを測る。平面形は、細長い楕円形を呈し、埋土には、炭化物、焼土が堆積し、弥生土器の細片が出土している。

第14図 SH04



※黒塗りは表層

第15図 SH05

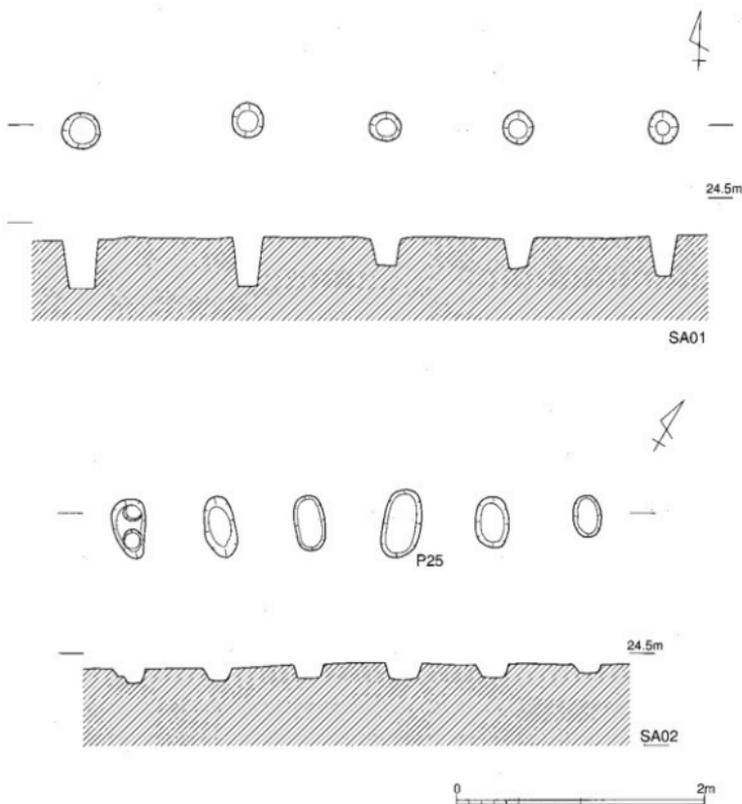
(2) 柵

SA01 (第16図)

A区の西側で検出した。柱穴は5基である。総延長は4.95mを測り、柱穴間の距離は平均1.2mである。掘り方の形状は円形で、直径は平均0.3m、深さは平均0.3mを測る。

SA02 (第16図)

B区の中央で検出した。柱穴は6基である。総延長は3.95mを測り、柱穴間の距離は平均0.7mである。掘り方の形状は楕円形で、長軸平均0.5m、短軸平均0.5m、深さは0.15mを測る。P25から弥生土器の細片が出土している。

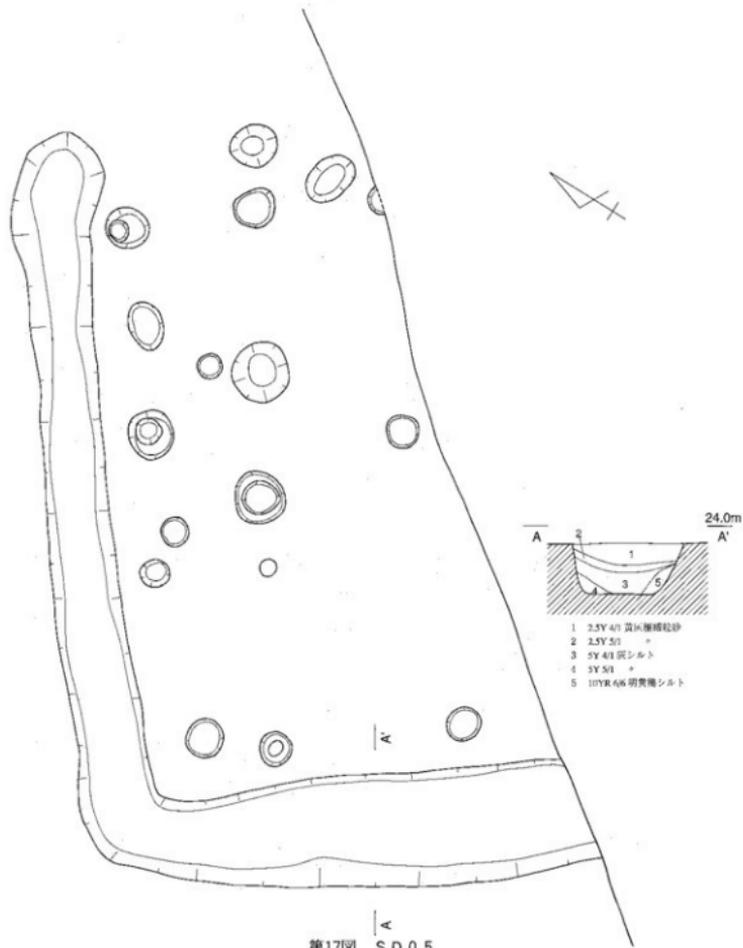


第16図 SA01・02

(3) 溝

SD05 (第17図)

B区東側で検出した、平面形がL字状の溝である。総延長は10.5mを測り、幅は、検出面で、0.48m~0.94m、溝底で0.2m~0.75m、断面形は台形を呈する。検出面からの深さは 平均0.45mであり、大きく3層の土層地積が認められる。埋土から少量の弥生土器が出土している。溝の南側では、柱穴群が検出されたが、規則性が認められず、性格については不明である。



(4) 土坑

SK09 (第18図)

A区西側で検出した。平面形は楕円形を呈する。長軸1.35m、短軸0.9m、断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは平均0.25mを測る。埋土から比較的多くの弥生土器が出土している。

SK14 (第18図)

A区西側で検出した。平面形は長楕円形を呈する。長軸4.0m、短軸1.25m、断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは平均0.25mを測る。埋土から少量の弥生土器が出土している。

SK16 (第18図)

A区中央北側で検出した。平面形は長楕円形を呈し、北側は調査区外へ延びている。長さ4.7m、幅は、検出面で0.46m～1.15m、溝底で0.35m～0.7mを測り、断面形は皿状を呈する。検出面からの深さは平均0.45mを測る。埋土から多量の弥生土器が出土している。

SK17 (第18図)

A区西側で検出した。平面形は長楕円形を呈する。長軸1.7m、短軸0.8m、断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは平均0.2mを測る。埋土からごく少量の弥生土器が出土している。

SK02 (第18図)

B区中央西側で検出した。平面形は長楕円形を呈し、北西側は調査区外に延びている。長軸2.0m、短軸0.8～1.15m、断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは平均0.25mを測る。埋土からごく少量の弥生土器が出土している。

SK03 (第18図)

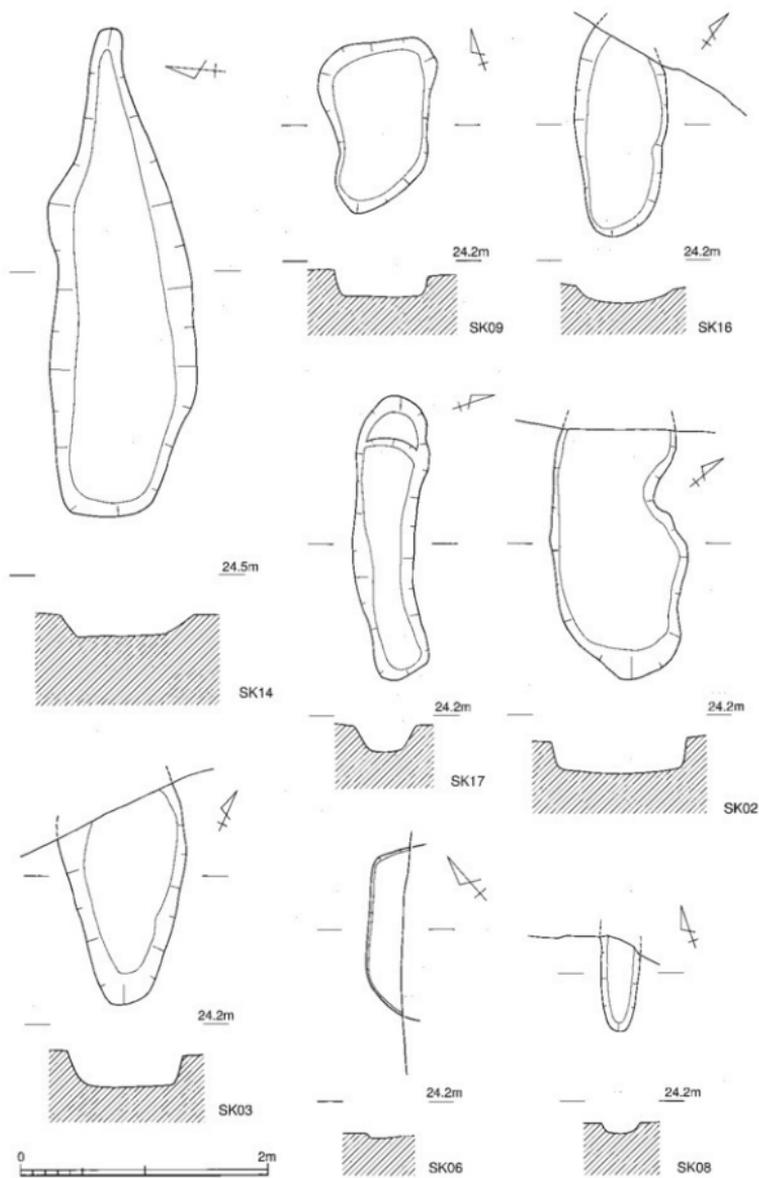
B区中央西側で検出した。平面形は楕円形を呈し、北西側は調査区外に延びている。長軸1.8m、短軸1.05m、断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは平均0.25mを測る。埋土からごく少量の弥生土器が出土している。

SK06 (第18図)

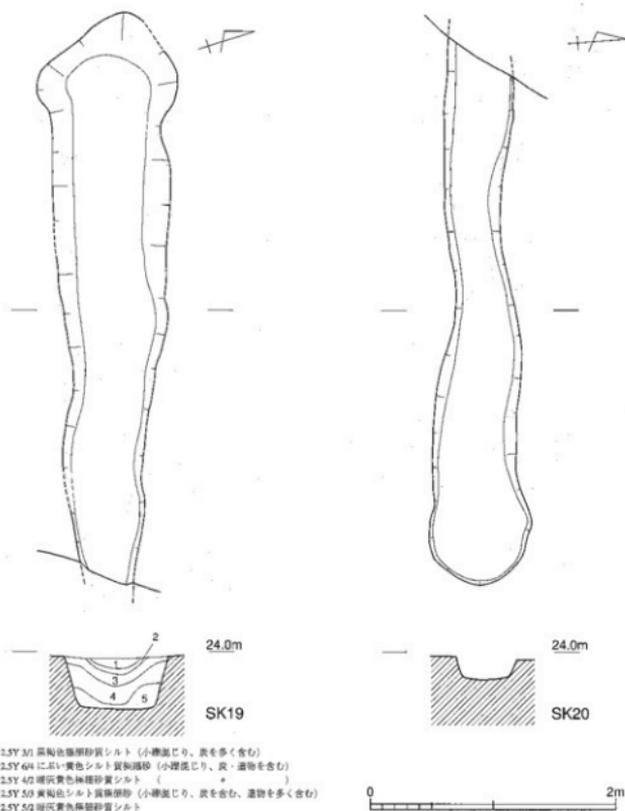
B区中央東側で検出した。南側は調査区外に延びるため、平面形は不明である。長軸1.35m、短軸0.3m(残存長)、断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは平均0.1mを測る。埋土からごく少量の弥生土器が出土している。

SK08 (第18図)

B区中央西側で検出した。平面形は楕円形を呈し、北側で溝とつながっている。長軸0.75m、短軸0.3m、断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは平均0.1mを測る。埋土からごく少量の弥生土器が出土している。



第18圖 土坑 (1)



第19図 土坑 (2)

SK19 (第19図)

B区東側で検出した。長さ4.7m、平面形は溝状を呈し、幅は、検出面で0.46m~1.15m、溝底で0.35m~0.7m、断面形は台形を呈する。検出面からの深さは平均0.45mを測り、埋土は、大きく5層の土層堆積が認められる。埋土から多量の弥生土器が出土している。

SK20 (第19図)

B区東側で検出した。長さ4.45m、平面形は溝状を呈し、幅は、検出面で0.46m~0.8m、溝底で0.3m~0.75m、断面形は台形を呈する。検出面からの深さは平均0.2mを測る。埋土からは弥生土器の細片が出土している。

第3節 遺物について

今回の調査で出土した遺物は、28ℓ入りコンテナにして6箱と少量である。遺構に伴って出土したのは弥生土器のみである。その他には、わずかに包含層から石器、古代・中世の須恵器・土師器・製塩土器・陶磁器などが出土しているが、経片のため図化を行わなかった。以下に遺構から出土した弥生土器を中心に報告する。

SH01 (第20図1・2)

遺物は図示した高杯、甕が出土しているのみである。1は高杯で口縁部外面に凹線を施している。2は甕の底部で、穿孔が施されている。

SH02・03 (第20図3~17)

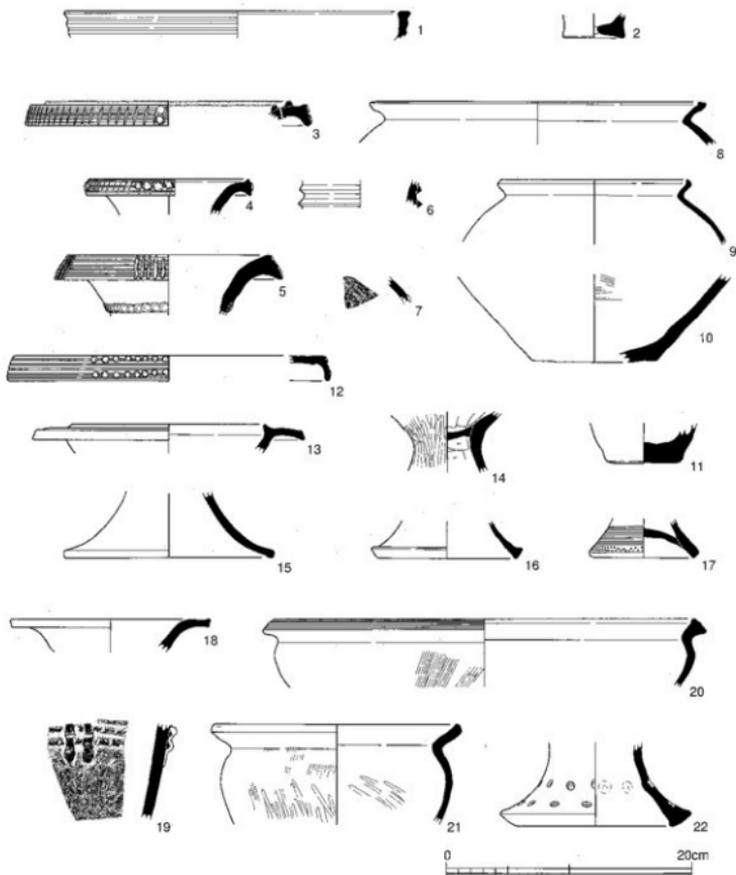
土器は、ほとんどがSH02の埋土(第13図の4層)から出土したものであるが、SH03が重複している部分についてはその埋土(第13図の1層)に含まれていたものが混入している可能性が高い。そのため、SH02・03と一括して報告する。壺7点、高杯3点、甕7点、底部8点、脚部3点などが出土している。3~5は壺の口縁部である。3は口縁端面に3条の凹線を施したのち、キザミ目を施し、さらに上下2段に円形浮文を施している。口縁部内面には2条のキザミ目突帯をもち、キザミ目突帯の間に穿孔を施している。4は口縁端面に4個を単位とした円形浮文をもっている。5は5条の棒状浮文に、指頭圧痕突帯、6は壺の頸部で貼り付け突帯をもっている。7は壺の体部に柳描きの斜格子文と円形浮文を施している。8・9は甕、10・11は底部である。12~14は高杯である。12は銅端部を垂下させたもので、垂下した部分の外面に、凹線と上下2段に円形浮文が8個以上を単位として施されている。13は銅端部を垂下させないもので、加飾も行われていない。15~17は脚部である。17は底部を粘土板で閉じた脚部で、7条の沈線とその下に円形の刺突が施されている。

SD05 (第20図18~22)

壺2点、鉢2点、甕3点、器台1点などが出土している。18は壺の口縁部で、加飾はなされていない。19、20は鉢で、20は口縁端面に4条の凹線を施している。19は深鉢と考えられるもので、2条以上のキザミ目突帯の上に2条の棒状浮文を施している。22は器台で、大きめの円形刺突を上下2列に施している。

SK16 (第21図23~30)

壺11点、高杯4点、甕6点、蓋1点、水指形土器1点、鉢2点、脚部3点などが出土している。23、24は口縁部が大きく開くタイプのものである。23は加飾が施されず、24は口縁端面に凹線を3条施したのち、棒状浮文が施され、頸部に不明瞭な凹線が施される。25、26は口縁部が短く外反するタイプのもので、口縁端面に凹線を施している。25は口縁端面に棒状浮文を、26は胴部の最大径の部分に板目瓦列点文を施している。27、28は口縁部が直立し、やや受け口状を呈するものである。27は頸部、28は口縁部に凹線を施している。29は壺の頸部から体部にかけての破片で、頸部の凹線は不明瞭である。30~33は高杯で、30~32は直立する口縁をもつもので、体部に凹線を施している。33は銅をもつもので、加飾はなされていない。34、35は台付き鉢で、34は胴部の最も膨らむ部分に列点文を施して

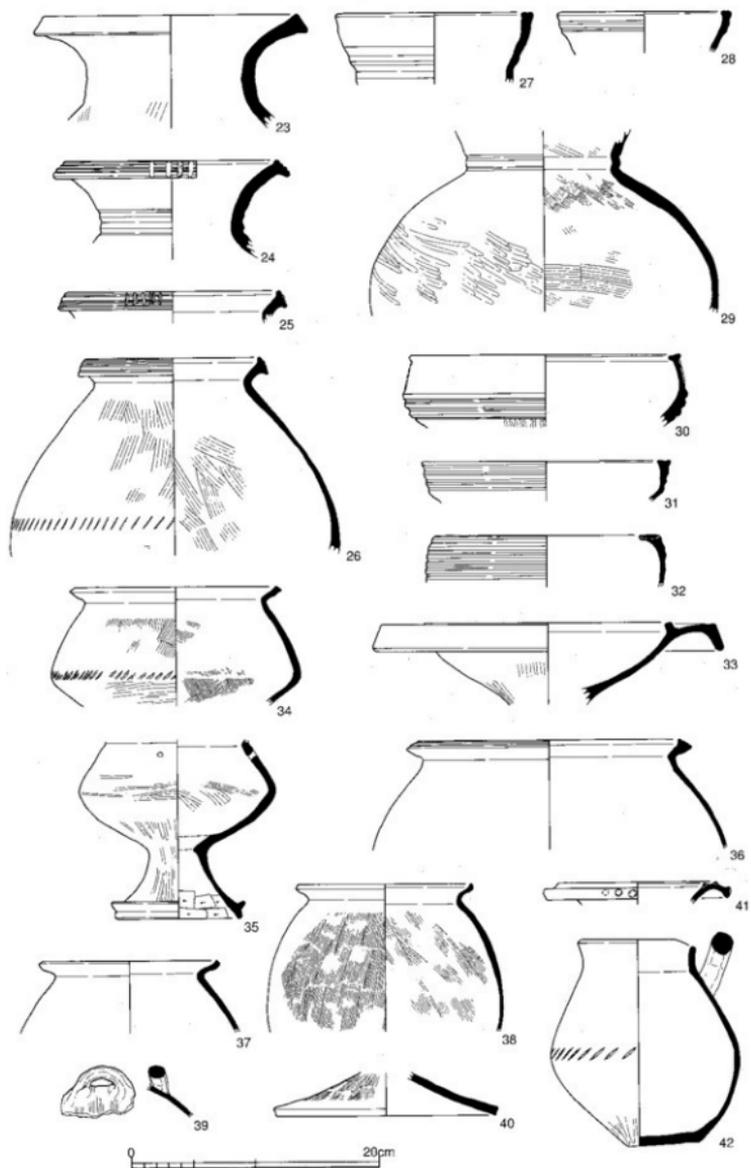


第20図 SH 01、02・03、SD 05 出土土器

いる。35は頸部直下に穿孔が施されている。36～38は甕で、36は口縁端面に凹線を施している。39は水差し形土器の把手の部分。40は蓋である。

SK 17 (第21図41・42)

壺1点、甕1点、水指1点などが出土している。41は甕の口縁部で、口縁端面に円形浮文、口縁部



第21图 SK16、17出土土器

内面に2条の突帯を施している。42は水差形土器で、胴部最大径に列点文を施している。口縁部の把手側は少し削り取られている。

SK02 (第22図43)

壺1点などが出土している。43は壺の頸部で、2条の貼り付け突帯が施されている。

SK03 (第22図44)

高杯1点、その他1点などが出土している。44は壺あるいは鉢の体部と考えられる。2条の貼り付け突帯の上に棒状浮文と突帯と突帯の間に円形浮文を貼り付けている。

SK06 (第22図45・46)

高杯1点、壺1点などが出土している。45は鋳端部を垂下させないタイプの高杯で、鋳の端面にキザミ目を施したのち、円形浮文を貼り付けている。46は壺の口縁部である。

SK08 (第22図47)

壺1点などが出土している。47は底部である。

SK09 (第22図49～57)

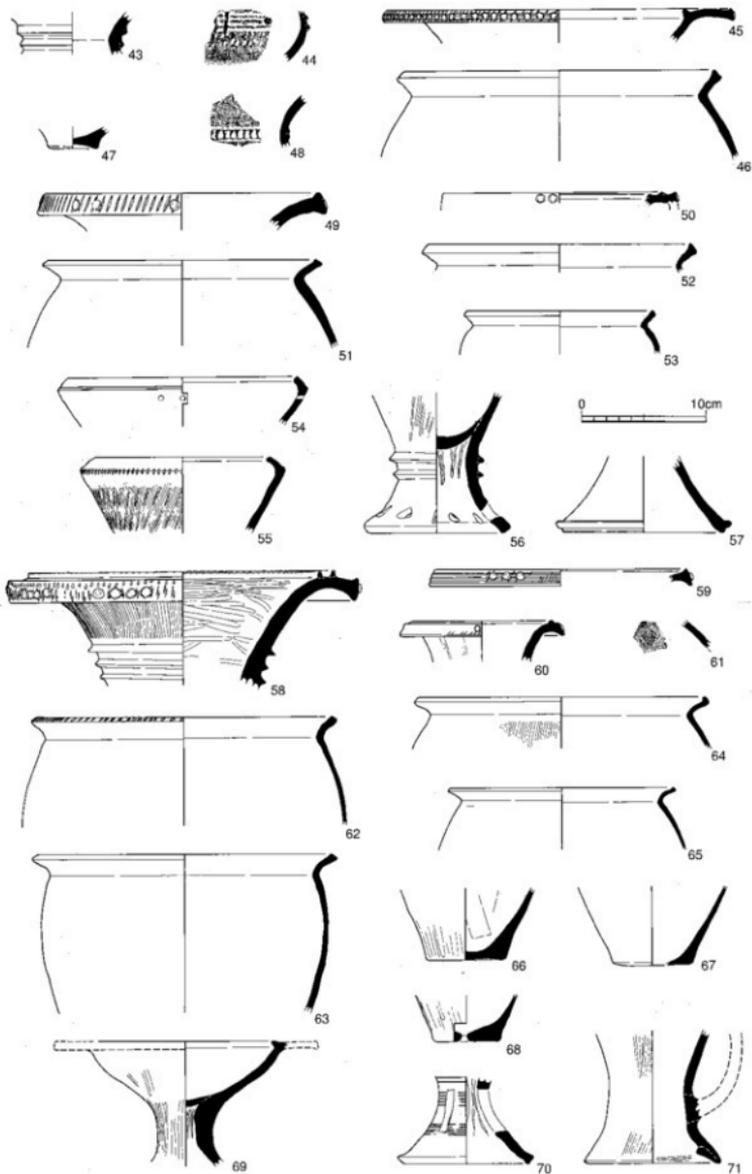
壺1点、高杯1点、甕5点、鉢3点、底部2点、脚部1点などが出土している。49は壺で、口縁端面にキザミ目を施し、円形浮文を貼り付けている。50は鋳端部を垂下させるタイプの高杯で、垂下した端面に円形浮文、鋳上面に2条の貼り付け突帯を施している。51～53は甕で、口縁端面に加飾は行われていない。54・55は口縁端部が内側に屈曲する鉢形土器である。54は屈曲部の下に穿孔がなされ、55は屈曲部にキザミ目をもち、貝殻列点文を体部に施している。56・57は脚部で、56は脚柱部に2条の貼り付け突帯、裾部に三角の刺突を施している。

SK14 (第22図48)

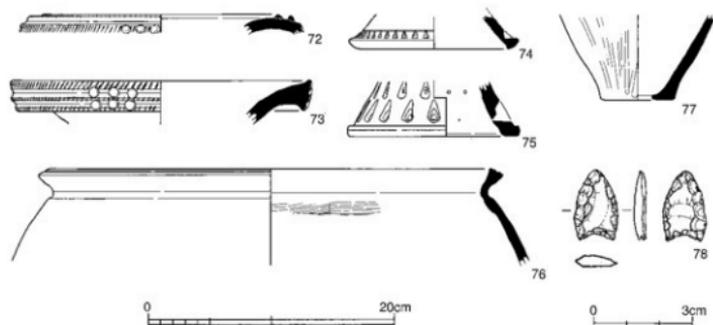
壺1点、甕3点、鉢1点、底部3点などが出土している。48は壺の頸部で、指頭正真突帯が施されている。

SK19 (第22図58～71)

壺4点、高杯1点、甕12点、ジョッキ形土器1点、水指形土器1点、底部5点、脚部1点などが出土している。58～61は壺である。58は頸部に3条の貼り付け突帯、口縁部内面に2条のキザミ目突帯をもち、口縁端面には上段に水滴形、下段に線状の刺突を施したのち、4つを単位とした円形浮文を貼り付けている。59は口縁端面にキザミと3条の凹線を施し、円形浮文3個を単位として貼り付けている。60は口縁部内面に1条の突帯をもち、口縁端面にキザミ目を施し、円形浮文を貼り付けている。61は壺形土器の体部で櫛歯格子文を施している。62～65は甕である。62は口縁端面に斜め方向のキザミ目を施している。64、65は口縁端部を上につまみあげている。66～68は底部である。66、68は外面にミガキが施されている。68は底面に穿孔がなされている。69は高杯形土器で、鋳の付くタイプのものである。70は脚部で、4条単位の平行沈線を2段に施したのち、3方に長方形のすかしを施している。71はジョッキ形土器と考えられる。



第22图 SK 02、03、06、08、09、14、19出土遗物



第23図 ビット、包含層出土土器・石器

ビット、包含層（第23図）

74のみP11から出土したもので、その他はすべてB区の包含層から出土したものである。

72は壺形土器の口縁部である。口縁部内面に2条の突帯をもち、口縁端面にはキザミを施したのち3個を単位とした円形浮文を貼り付けている。73は壺形土器の口縁部である。口縁端部を拡張する形態で、端面にキザミを施したのち、2条の凹線を施し、その凹線上に円形浮文を貼り付けている。74は脚部で、三角形の刺突を施している。75は脚部で水滴形の刺突を2段に施している。76は甕形土器で、口縁端面に1条の凹線を施している。77は底部で外面にミガキを施し、底面に穿孔を施している。78はサヌカイト製の凹基式石鏃である。側面に表裏両面から調整剥離が施されるが、周縁に限られ表裏両面に素材剥片の剥離面を残している。重量は1.1gである。

以上のうち、土器が比較的まとまって出土したのはSH02・03、SK16、SK19である。このうち最も古いと考えられるのはSK19出土土器である^m。壺は頸部に貼り付け断面三角突帯をもち(58)口縁端面に凹線を持たないもの(49、58、60)が多い。このことから、中期Ⅳのなかでも初期のものと考えられる。SH02・03は壺の頸部に貼り付け断面三角突帯(6)や指頭圧痕突帯(5)をもち、口縁端面に凹線を持っているもの(3、4、5)が多い。このことから、中期ⅣのうちSK19よりやや新しい時期のものと考えられる。SK16は壺の頸部や口縁端面に凹線(24~26)をもつものが多く、口縁端面の加飾は少なくなっている。また、口縁部が直立するタイプの壺(27、28)が出現している。このことから、中期Ⅴの時期と考えられる。その他、SH01は1の高杯、SD05は20の鉢から中期Ⅴの時期と考えたい。

第4章 まとめ

清水遺跡の発掘調査成果報告の終わりにあたり、清水遺跡の立地とその変遷と、清水遺跡の竪穴住居跡の評価についての2点についてまとめておく。

1. 清水遺跡の立地とその変遷

今回の清水遺跡の発掘調査では、弥生時代中期後半の遺構が地点を変えて見つかった点に大きな意義がある。また、清水遺跡では、これまでほ場整備に伴い、龍野市教育委員会が数次にわたって発掘調査を実施しており、周辺での遺跡の消長もかなり明らかとなっていることから、ここでは、これらの発掘調査の成果を援用して、清水遺跡の変遷の概略を述べることにする。まずはじめに、清水遺跡の立地をみてみよう。

第24図は、1989～1990年に実施されたほ場整備以前の現水田面の高さを基に復元した等高線図である。この図から、清水遺跡周辺は、中垣内川が形成した扇状地上の氾濫原に位置しており、旧河道と中州状微高地からなることが明瞭に読みとれる。このことは試掘調査結果からも裏付けられる。ここでは、これらの地形の特徴に応じて、便宜的に南西から北東方向に順に、微高地Ⅰ～Ⅳ、旧河道Ⅰ～Ⅳと呼ぶことにする。

この微地形の分析の結果、今回の調査範囲が、微高地Ⅰ・Ⅱとその間の旧河道もしくは後背湿地に該当していることがわかる。出土遺物からみると、弥生時代中期後半に微高地Ⅰ・Ⅱで居住を始め、中期末には微高地Ⅱに移動したことがわかる。また、ほ場整備に伴う周辺の調査では、微高地Ⅲの北半部で弥生時代後期後半の竪穴住居跡が、微高地Ⅲ及び微高地Ⅳの北半部で弥生時代終末期の竪穴住居跡がそれぞれ確認されている。

これらの事実から、清水遺跡では、弥生時代後期前半は欠くものの、弥生時代中期後半以降、集落の中心が、徐々に南から北側の扇状地のより高い場所へ移動していったことがわかる。遺構の分布からみる限り、弥生時代後期後半から終末期にかけての時代が清水遺跡が最も栄えた時代であるといえよう。

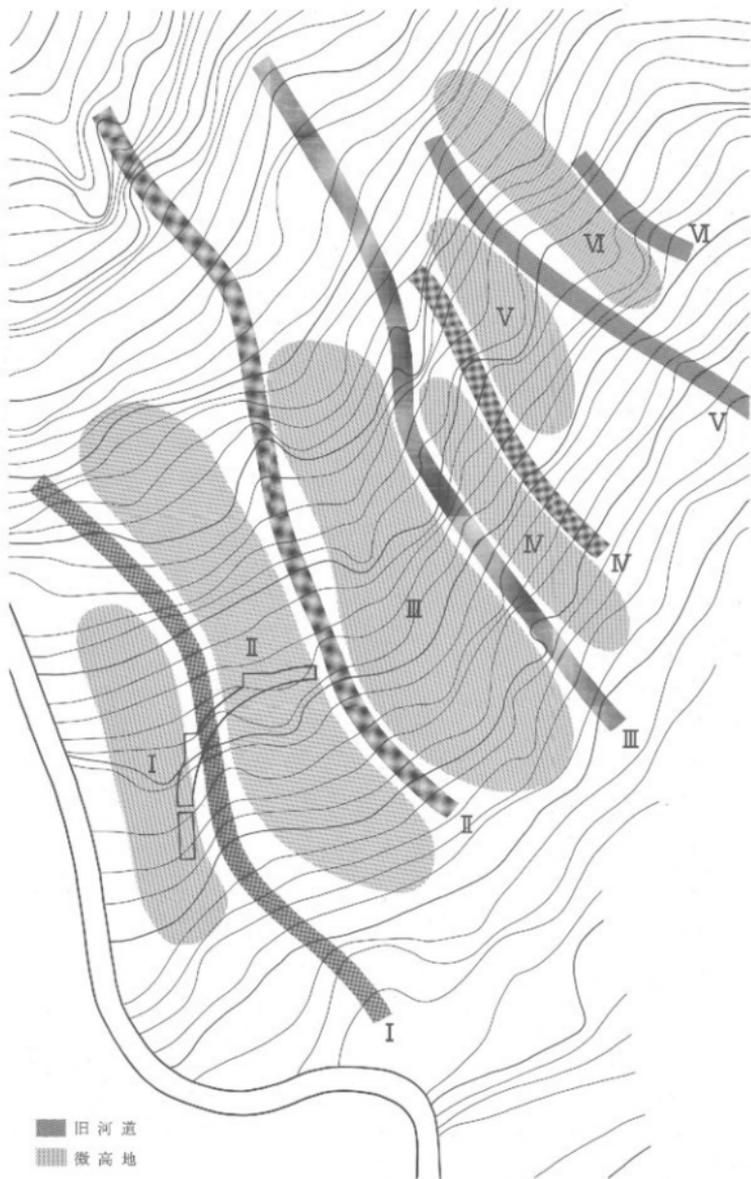
2. 播磨の竪穴住居の系譜

C地区でみつかった弥生時代中期後半の竪穴住居跡(SH02・03)は、数度建て替えられていたが、この竪穴住居にはいくつかの特徴がある。そのひとつは内部構造で、この住居が播磨地域に特徴的な中央土坑の様式を取り入れていることで、ふたつめはその平面形態で、円形住居から方形住居へと建て替えられており、当遺跡での住居の方形化の年代が押さえられることである。

これらの点をふまえた上で、中央土坑に視点を置いて弥生時代中期後半から後期の播磨地域の竪穴住居について考えてみたい。

10型中央土坑をもつ竪穴住居跡

近年、弥生時代中期後半の播磨地域には共通の住居の様式があることがわかってきた。それは、住居の床面中央に設けられた中央土坑の形態である。この土坑は、それまでの住居に一般的に見受けられる灰を溜めた円形の土坑¹⁾とは異なり、深さ30センチ内外で埋土にほとんど灰を含まないやや楕円形を呈



第24图 清水道跡微地形图

した土坑と、その相対的に南側の位置に細長く葉巻形をした深さ5センチ前後の炭や灰の溜まった浅い土坑を併せ持つものである。

この種の中央土坑は、1983年の三田市奈カリ与遺跡の報告³⁵⁾でその機能が分析されたところから注目されはじめ、赤穂市周世人相遺跡³⁶⁾や西脇市大垣内遺跡³⁷⁾、三田市川除藤ノ木遺跡³⁸⁾、姫路市六角遺跡³⁹⁾など播磨地方を中心としてかなり普遍的に見受けられるようになり、その形態的な特徴から、細長く浅い土坑を「1」、深く円い土坑を「0」として、便宜的に「10型中央土坑（いちまるがたちゅうおうどうこう）」と呼ばれるようになった³⁸⁾。1993年には、春日町七日市遺跡の発掘調査でも確認され、丹波地方にも及んでいることが確認されている³⁹⁾。

10型中央土坑の年代とその系譜

これまで確認されている例から、10型中央土坑の出現時期は、弥生時代中期後半の初めころと考えていまいだろう。清水遺跡SH02・03神戸市西区玉津田中遺跡SE46023³⁸⁾や⁴⁰⁾が該当する。反対に、最も新しい住居は、後期後半の大垣内遺跡SB11の例があげられるから、10型中央土坑を有する竪穴住居は、およそ、弥生時代中期後半の初め（凹線文の始まり）から弥生時代後期（V期）後半から末まで築かれたと考えていまいだろう。

それでは、この10型中央土坑はどこでどのように生まれたのだろうか。分布の中心が播磨地方特に西播磨地方にあることから、この地に生まれた可能性が高い。この土坑の成立には、中央土坑をも含めた住居建築様式の変化・発達があったに違いない。例えば、10型中央土坑は比較的大型の住居に採用されているが、逆に言えば、住居の大型化によってこそ10型中央土坑の採用が可能になったと考えられるのである。また、初期期の10型中央土坑の両脇には、必ず1対のピットを伴っている。これは、弥生時代の前期以降西日本に広まる、いわゆる松寿型竪穴住居⁴¹⁾の特徴であり、この種の住居から発展してきた可能性が予想される。

さらに、この土坑の注目すべき点は、形態的な特徴よりもむしろその機能にあり、それまでの灰穴・炉土坑の機能を分化し、独立した土坑に与えたもの考えられるのだが、現状では楕円形土坑の機能が明らかではなく、十分な説明ができない。

10型中央土坑を有する竪穴住居の分布

次に、10型中央土坑を有する竪穴住居の分布範囲をみておきたい。

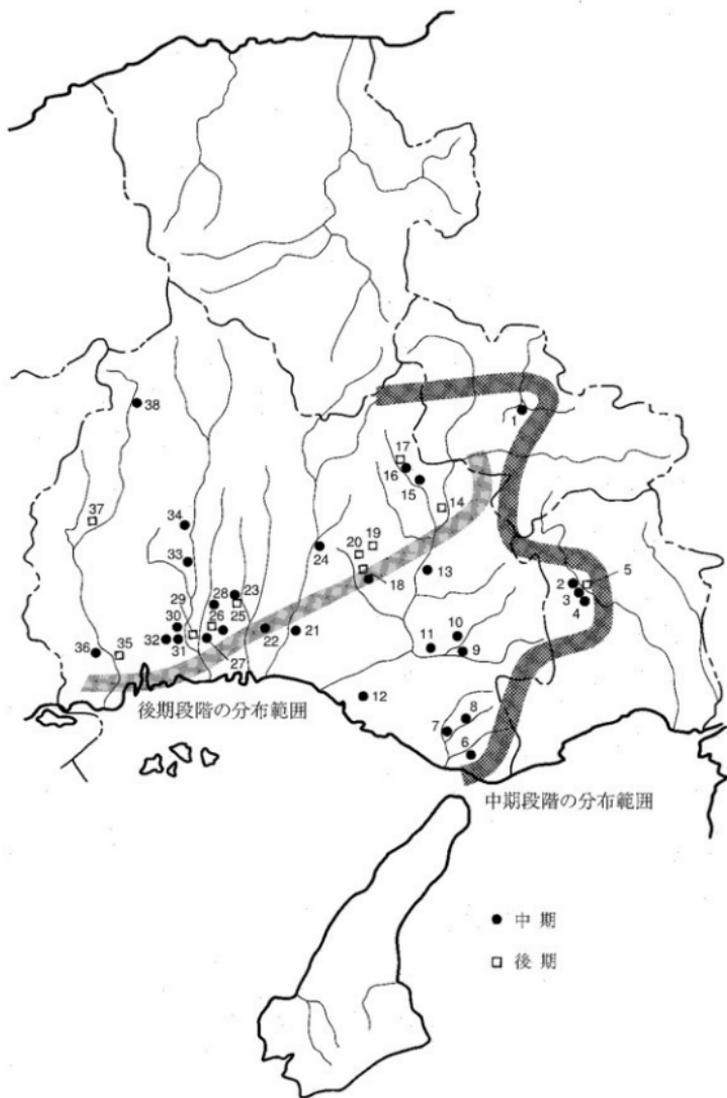
現在兵庫県域のうち最も東で見つかっているのは、北摂地域の三田市川除藤ノ木遺跡例である。これは後期の例であるが、隣接した三田市奈カリ与・平方³⁸⁾・有鼻³⁸⁾などの遺跡では中期後半の住居はほとんどがこの中央土坑を採用している。

最も北の例は日本海に注ぐ由良川水系にある春日町七日市遺跡の例である。これは中期後半のものであるが、遺跡全体からみると、その占める率は低い。

最も南側は、播磨臨海部には普遍的に見つかっているが、淡路島では今のところ検出例がない。

最も西側の例は、佐用町長尾沖田遺跡³⁸⁾や、赤穂市東有年・沖田遺跡³⁸⁾・周世人相遺跡の例である。また、やや不確かではあるが、岡山県百間川兼基遺跡の弥生後期の竪穴住居2³⁸⁾が同様の例ではないかと考えられる。

このように、10型中央土坑を有する竪穴住居の分布範囲は、播磨地方の全域と、隣接する三田及び丹波地方の一部に及んでいる。



第25図 10型土坑を有する竪穴住居の分布

番号	所在地	遺跡名	時期
1	春日町	七日市	中期 (IV)
2	三田市	有鼻	中期 (IV)
3	三田市	中西山・平方	中期 (IV)
4	三田市	奈カリ与	中期 (IV)
5	三田市	川除藤ノ木	後期 (V)
6	神戸市	池上北	中期 (IV)
7	神戸市	玉津田中	中期 (IV)
8	神戸市	西神第65号地点	中期 (IV)
9	三木市	与呂木	中期 (IV)
10	三木市	細川女谷	中期 (IV)
11	三木市	年ノ神	中期 (IV)
12	加古川市	美乃利	中期 (IV)
13	滝野町	穂積高町	中期 (IV)
14	西脇市	大垣内	後期 (V)
15	中町	西安田	中期 (IV)
16	中町	思い出	中期 (V)
17	中町	安楽田夫婦岩	後期 (V)
18	加西市	長本	中期 (IV) ~ 後期 (V)
19	加西市	朝垣	後期 (V)
20	加西市	長塚	後期 (V)
21	姫路市	黒岩山	中期 (IV)
22	姫路市	八幡	中期 (IV)
23	姫路市	六角	中期 (IV) ~ 後期 (V)
24	福崎町	西広畑	中期 (IV)
25	太子町	城山	中期 (IV)
26	太子町	東保高出	後期 (V)
27	太子町	立岡	中期 (IV)
28	龍野市	寄井	中期 (IV)
29	龍野市	片吹	後期 (V)
30	龍野市	清水	中期 (IV)
31	龍野市	養久乙城山	中期 (IV)
32	龍野市	養久山前地	中期 (IV)
33	新宮町	新宮宮内	中期 (IV)
34	山崎町	鹿沢本多町	中期 (IV)
35	赤穂市	周世入相	後期 (V)
36	赤穂市	東有年・沖田	中期 (IV)
37	佐用町	長尾沖田	中期 (IV)
38	千種町	大森	中期 (IV)

第2表 10型中央土坑を有する竪穴住居一覧表

次に、その時期別の分布範囲をみておく。

10型中央土坑が出現し、かつ最も分布地域が拡大するのは中期後半 (IV期) である。ここで言うIV期とは凹線文の出現以降を指すが、この土坑を有する住居は、播磨型とも呼ばれる、凹線文などが土器へ加飾されることが最も盛んになる時期の土器と共に分布域を拡大しているようである。

この時期の分布域は播磨全域に及び、三田盆地や丹波地域にも広がっている。特に三田盆地の有鼻遺跡ではほぼ全ての住居がこのタイプであり、平方遺跡・奈カリ与遺跡などの遺跡でもかなり高い率で見受けられる。丹波地域では、中央分水界を越えた七日市遺跡の最北例があるが、集落内ではⅣ期末になって導入されたようで、同時期の住居跡に占める割合は高くない。

この時期の住居のⅠ〇型中央土坑を有する竪穴住居の特徴として、中規模以下（４本柱もしくは２本柱）の住居の場合、平面形が隅円方形を呈するものが多く、住居の方形化を指向しているのも特徴である。後期（Ⅴ期）になると、中期に比べると播磨では分布範囲がかなり狭まり、三田市川除藤ノ木遺跡例を除くと、北播磨から西播磨にかけての、西脇市－加西市－姫路市北部－龍野市－赤穂市を結ぶラインの北西側にのみ分布している。このラインはほぼ中国山地の南麓のラインと一致している。また、中期には今のところ確認されていない吉備地域でも、後期には百間川兼基遺跡などで類似例がある。

このように、後期にはⅠ〇型中央土坑を有する竪穴住居の分布範囲はかなり狭まっていることがわかる。

その一方で、この時期の東播磨を中心とした臨海平野部および加古川流域などⅠ〇型中央土坑の認められない地域では、比較的大型の灰の詰まったいわゆる灰穴炉を持つ住居が一般的になる。この地域では後期初頭の住居例はほとんど見つかっていないが、後期中葉以降は平面形が円形で５本もしくは６本柱の住居が主流であり、後半期からは屋内高床部（いわゆるベッド状遺構）を有する住居が広がっている。

つまり、北～西播磨地域では前代からのⅠ〇型中央土坑が引き続き用いられるのに対し、東播磨地域では復古調ともいうべき、灰穴炉や、新たに屋内高床部を持つ円形・多角形住居が取り入れられているのである。

もちろん両者が入り乱れる地域や、両者の融合した形態のものもある。たとえば、三田市川除藤ノ木遺跡の後期中葉の例では、多数見つかっている住居の中でⅠ〇型中央土坑はたった１例である。その後継承されないところから、やや東播磨の動きから取り残された盆地にあるため、少しの間前代の形式が残ったと考えることができる。

また、加古川上流の西脇市大垣内遺跡例では、SB01とSB11の２棟はⅠ〇型中央土坑を取り入れながら、屋内高床部を持ち平面形は多角形である。この地域が両者の融合する地域ととらえることができよう。

まとめ

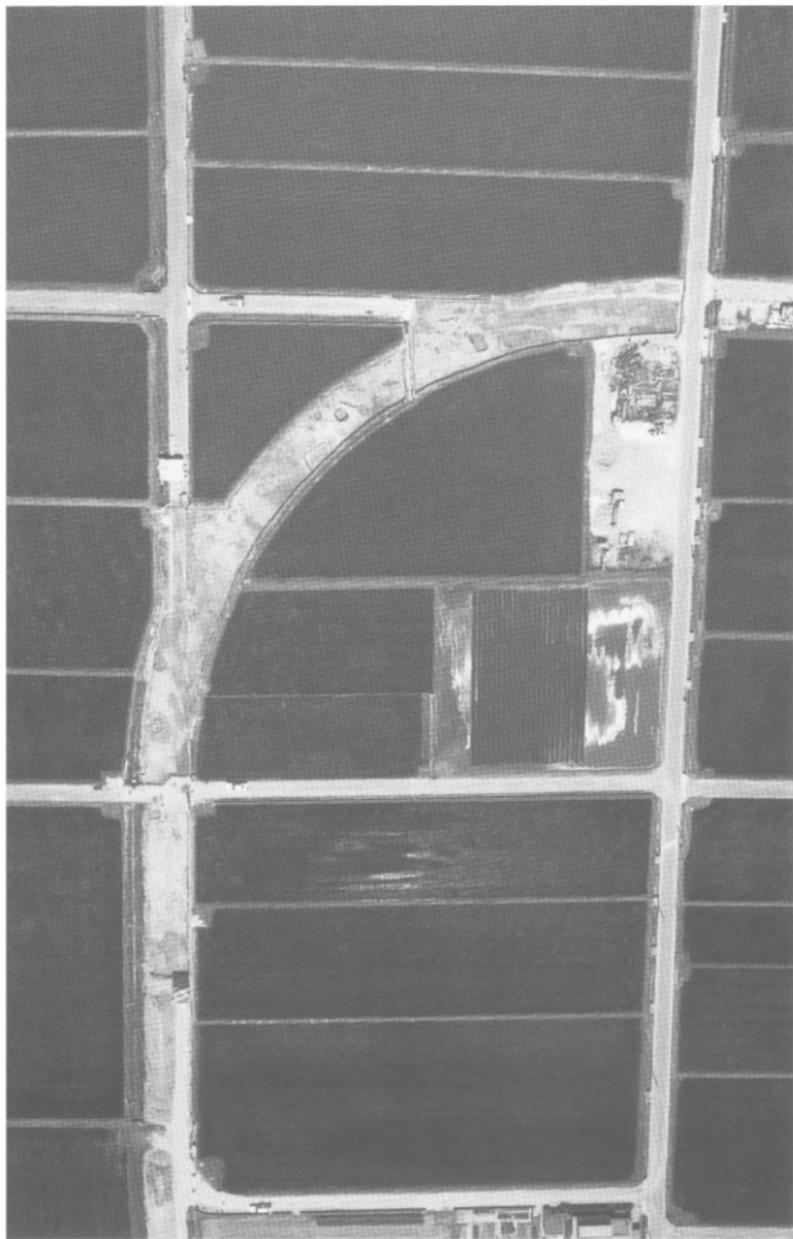
これらの事を整理すると、弥生時代中期後半の西播磨では、前代からの伝統的な竪穴住居を進展させて、Ⅰ〇型中央土坑など独自の住居形態を進化させたが、後期になるとこの伝統を受け継ぐのは北～西播磨に限られ、東播磨は畿内地域と歩調を合わせるように、前代への回帰ともとれる独自の展開を進めているようである。

これら住居の様式の違いは、畿内・吉備・北部九州といった勢力の増大期にあつて、政治・経済的に規程されはじめた社会関係の中では、極めて文化的所産によるものであることを示しているといえよう。

註

- (1) 下記文献のほか、志水豊章、市村高規、岸本道昭の各氏のご教示を得た。
龍野市教育委員会『土地改良総合整備事業（清水新地区）に伴う埋蔵文化財確認調査実績報告書
清水遺跡 小神南遺跡』 1989年
龍野市教育委員会『土地改良総合整備事業（清水新地区）に伴う埋蔵文化財確認調査実績報告書
清水遺跡 小神出屋敷遺跡』 1990年
- (2) 中央土坑に関する記述は下記の文献を参照した。
多賀茂治「玉津田中遺跡の竪穴住居について」『玉津田中遺跡』第6分冊 1996年
- (3) 弥生土器の時期については下記の文献を参照した。
今里幾次「播磨弥生式土器の動態」『考古学研究』第15巻第4号 1969年
山本三郎「播磨中期弥生式土器の実態」『川島・立岡遺跡』 1971年
古本寛「中期後半の弥生土器について」『尾崎遺跡Ⅱ』 1995年
岸本道昭「播磨弥生中期後半の土器編年新考」『美久山・前地遺跡』 1995年
- (4) 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』 1989年
- (5) 兵庫県教育委員会『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』 1983年
- (6) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『周世入相遺跡』 1990年
- (7) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『大垣内遺跡』 1991年
- (8) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『川除・藤ノ木遺跡』 1992年
- (9) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『六角遺跡』 1994年
- (10) 多賀茂治「玉津田中遺跡の竪穴住居について」『玉津田中遺跡』第6分冊 1996年
- (11) 平成5年度兵庫県教育委員会調査、多賀茂治氏の御教示による。
- (12) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『玉津田中遺跡』第5分冊 1996年
- (13) 中間研志「松菊里型住居—我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究—」『東アジアの考古と歴史』中 1987年
- (14) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ』 1993年
- (15) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成7年度 年報』 1996年
- (16) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『長尾・沖田遺跡（Ⅰ）』 1991年
- (17) 平成4年度赤穂市教育委員会調査
- (18) 岡山県古代吉備文化センター『百間川兼基遺跡3 百間川今谷遺跡3 百間川沢田遺跡4』
1997年

写真図版



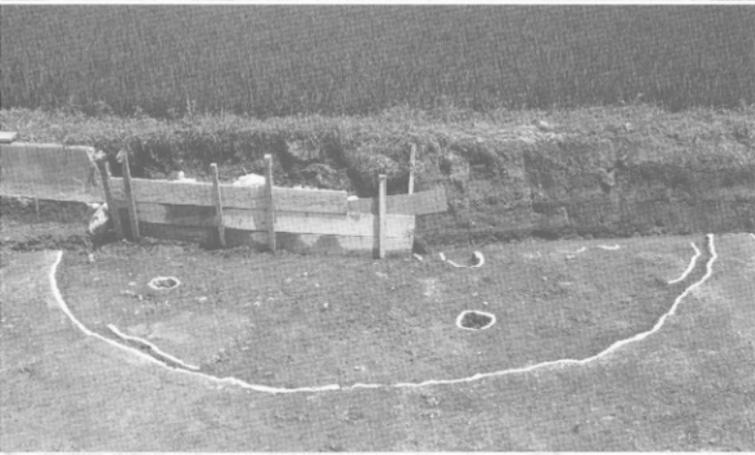
調査地全景（空中写真）



A区全景（東から）



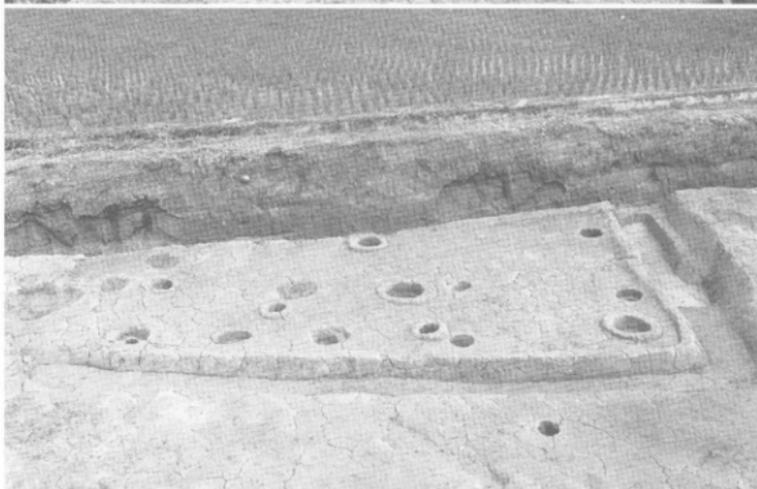
A区西半部（東から）



SH01（南から）



B区全景 (東から)



SD05 (北西から)



SD5土層断面 (北西から)



SK19 (東から)



SK19土器出土状況 (西から)



SK19土層断面 (東から)



C区全景 (北から)



SH02・03 (南東から)



SH02・03 (北から)



SH03 中央土坑 (南西から)



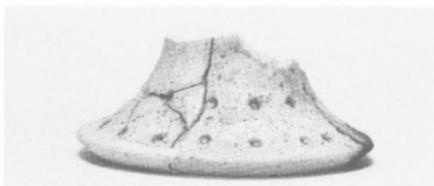
D区全景 (南から)



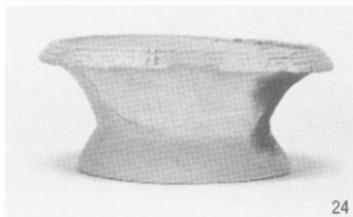
SH05 中央土坑断面 (北から)



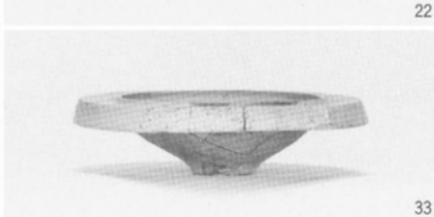
17



22



24



33



35



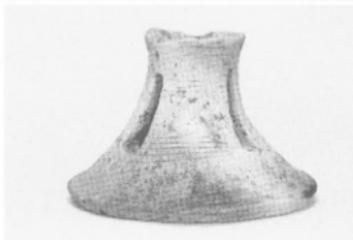
42



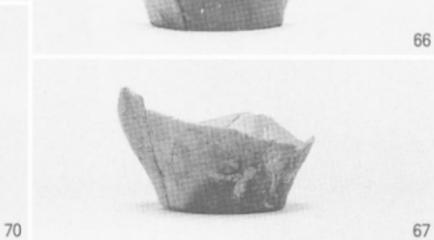
56



58



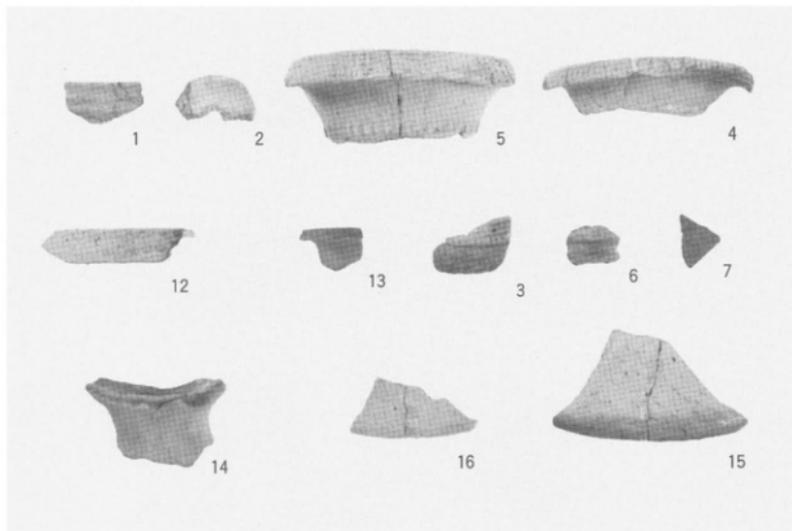
70



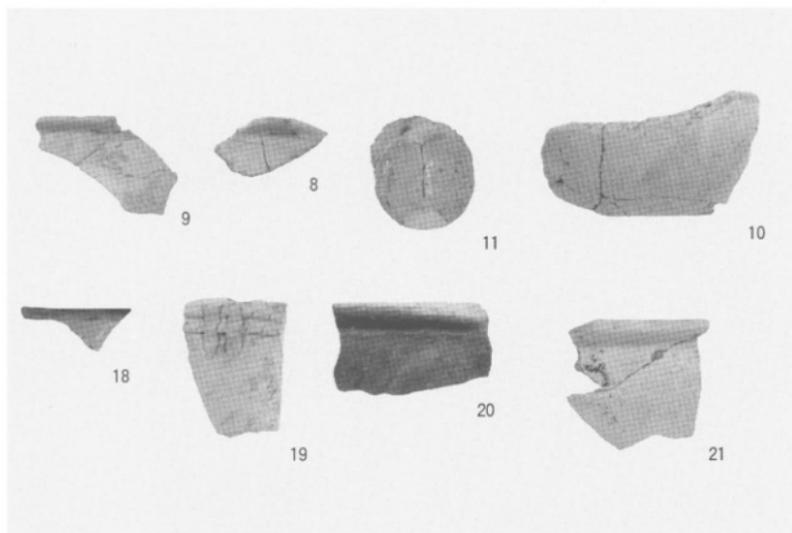
66



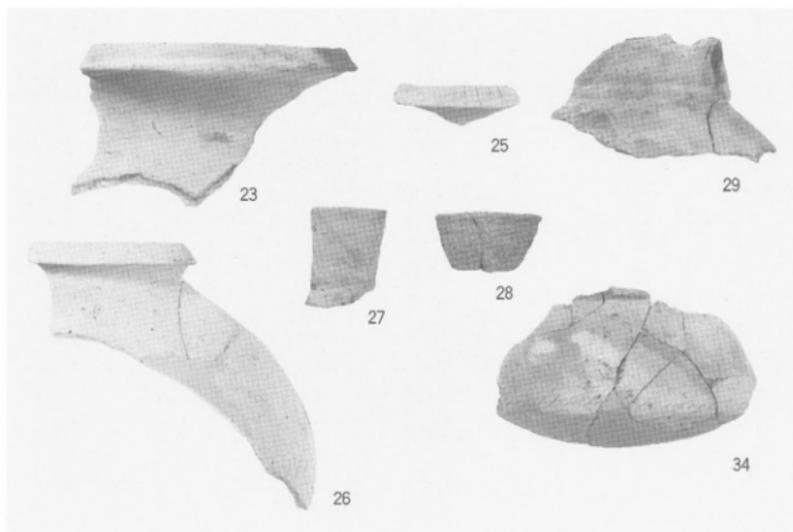
67



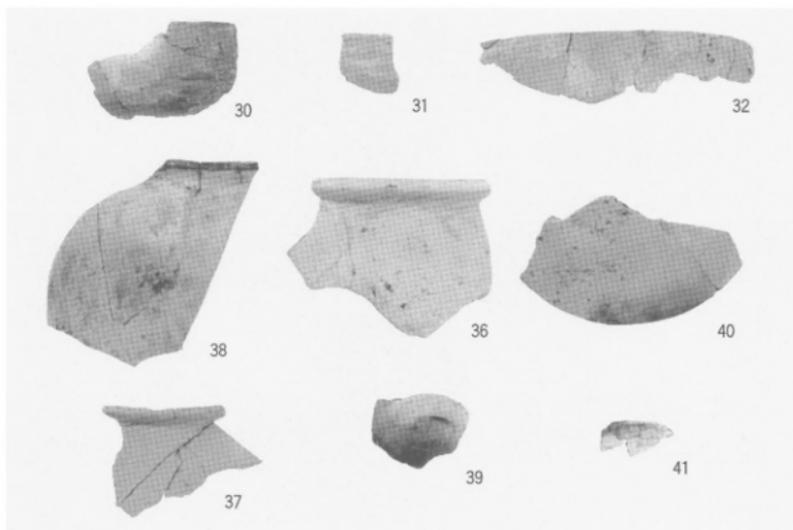
SH01・02・03出土遺物



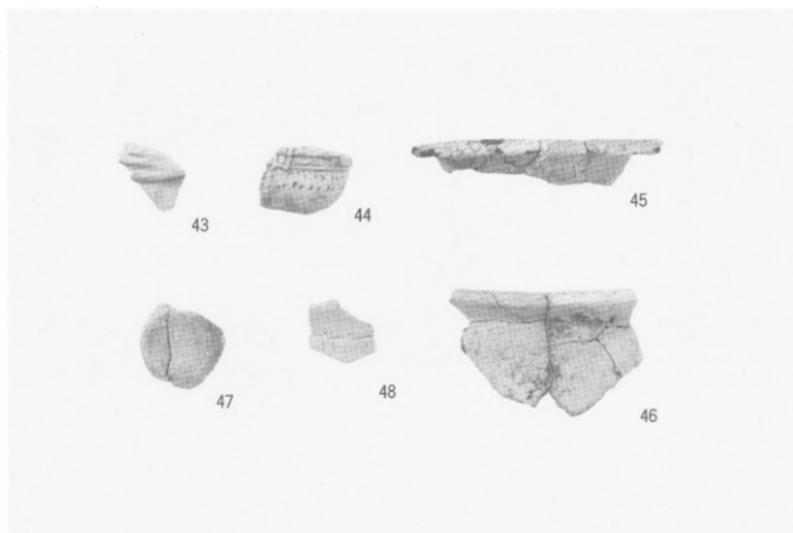
SH02・03・SD05出土遺物



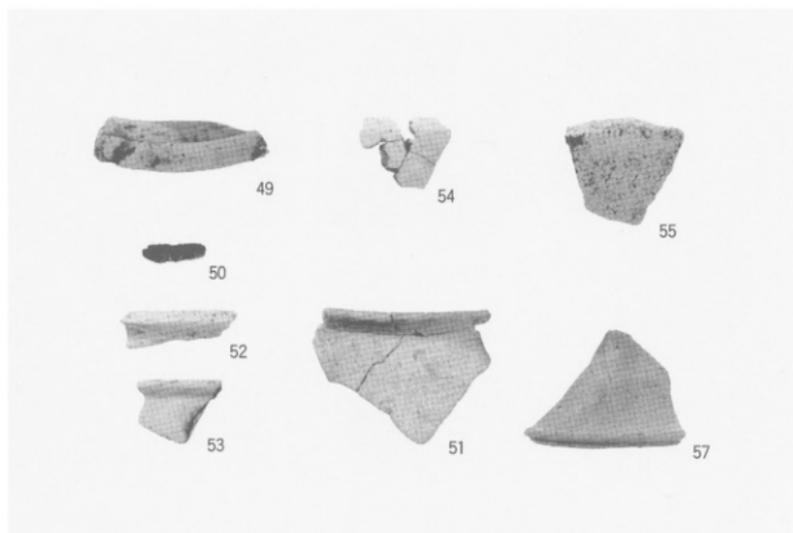
SK 16 出土遺物



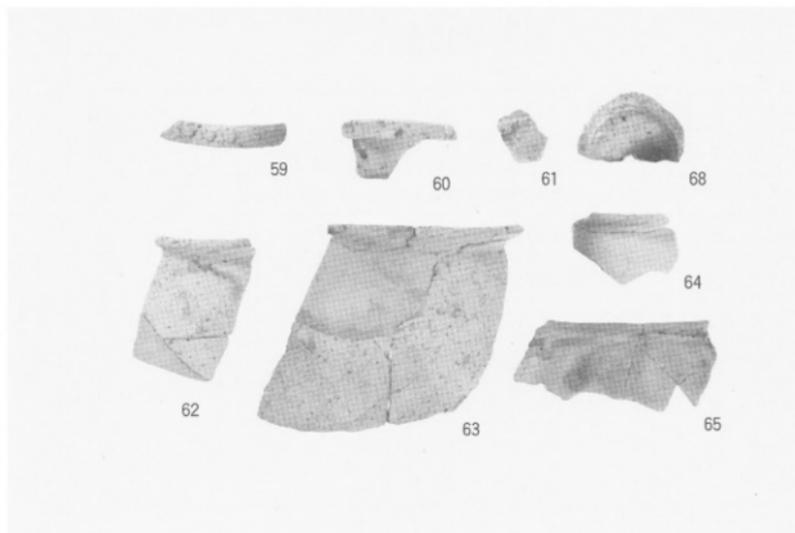
SK 16・17 出土遺物



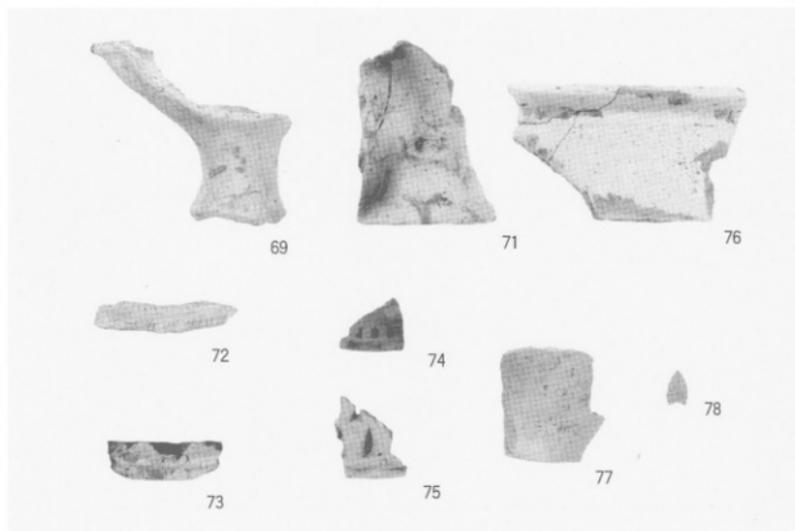
SK02・03・06・08・14出土遺物



SK09出土遺物



SK19出土遺物



SK19、pit、包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しみずいせき							
書名	清水遺跡							
副書名	県道桑原北山掛保川線緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第183冊							
編著者名	山下史朗・松岡千寿・池田征弘							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 In 078-531-7011							
発行年月日	西暦1999(平成11)年 3月 31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
しみず 清水	ひょうごけん 兵庫県電野市 いづみにししみず 揖西町清水	28211	930123 940171 940185	34度 51分 00秒	134度 31分 38秒	発掘 19930802) 19930805 発掘 19940524) 19941007	156 m ² 88 m ² 2201 m ²	県道桑原北山掛保川線緊急道路整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
清水	集落跡	弥生中期	竪穴住居跡 土坑 溝	弥生土器 石器				

兵庫県文化財調査報告 第183冊

清 水 遺 跡

— 県道桑原北山掛保川線緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告書 —

平成11年3月31日発行

- 編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
TEL 078-531-7011
- 発 行 兵庫県教育委員会
〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
- 印 刷 株式会社トライス
〒650-0016 神戸市中央区横通1丁目1番9号
-